４.長岡京跡右京第997次（7ANGKN-3地区）・松田遺跡発掘調査報告

１．はじめに

今回の調査は、平成22年度京都縦貫自動車道整備事業に係る発掘調査を、西日本高速道路株式会社関西支社京都工事事務所の依頼を受けて実施した。

調査地は、乙訓郡大山崎町字円明寺小字松田（大山崎中学校グランド西側）にあたる。この地点は、長岡京復原案（旧条坊）によると、九条大路と西二坊大路の交差点付近（旧条坊復原案）となる。また、東西350m、南北500mの範囲に広がる、縄文時代から中世にかけての集落遺跡である松田遺跡の南西部にもあたる。

今回の調査地の周辺では数回の調査が行われ、多くの成果を得ている。現在の大山崎中学校校舎新築に伴う調査（長岡京跡右京第933次）では、数時期の遺構面を確認しており、弥生時代の流路跡や古墳時代の竪穴式住居跡など、鎌倉時代の掘立柱建物跡や柵列などの遺構を検出している。今回の調査地北側では長岡京跡右京第940次調査が行われているが、第２・３・５トレンチは小泉川の氾濫原にあたっており、遺構の検出には至っていない。今回の調査地の南側では長岡京跡右京第971・974次が行われており、中世の遺構は確認できなかったが、古墳時代後期の竪穴式住居跡などを検出している。周辺地域におけるこのような成果から、今回の調査地の北側は小泉川の氾濫域にあたり、南側は古墳時代と鎌倉時代の遺構が存在するものと想定された。しかし調査対象地内の遺構の分布状況は不明であったため、南北方向と東西方向に線掘りによる調査をし、遺構が広がる範囲を確定し、面的に展開した。調査地は、小泉川の河川保全区域にあたるため、西日本高速道路株式会社関西支社京都工事事務所が乙訓土木事務所に掘削許可申請を提出し、発掘調査を実施している。

本報告書で使用した国土座標は、現地記録も含め日本測地系の第Ⅵ座標系を使用した。土層および遺物の色調は農林水産技術会議監修の『新版標準土色帳』を用いた。現地調査ならびに報告については、京都府教育委員会、大山崎町教育委員会、乙訓土木事務所を始め関係機関、大山崎中学校、地元各自治会や近隣住民の方々のご指導とご協力をいただいた。記してお礼申し上げます。なお、本報告は岡崎・田代が執筆した。

現地調査責任者　調査第２課長　肥後弘幸

調 査 担 当 者　調査第２課主幹第３係長事務取扱　石井清司
同　次席総括調査員　田代　弘
同　第２係　専門調査員　岡崎研一
同　第１係　主査調査員　柴　暁彦

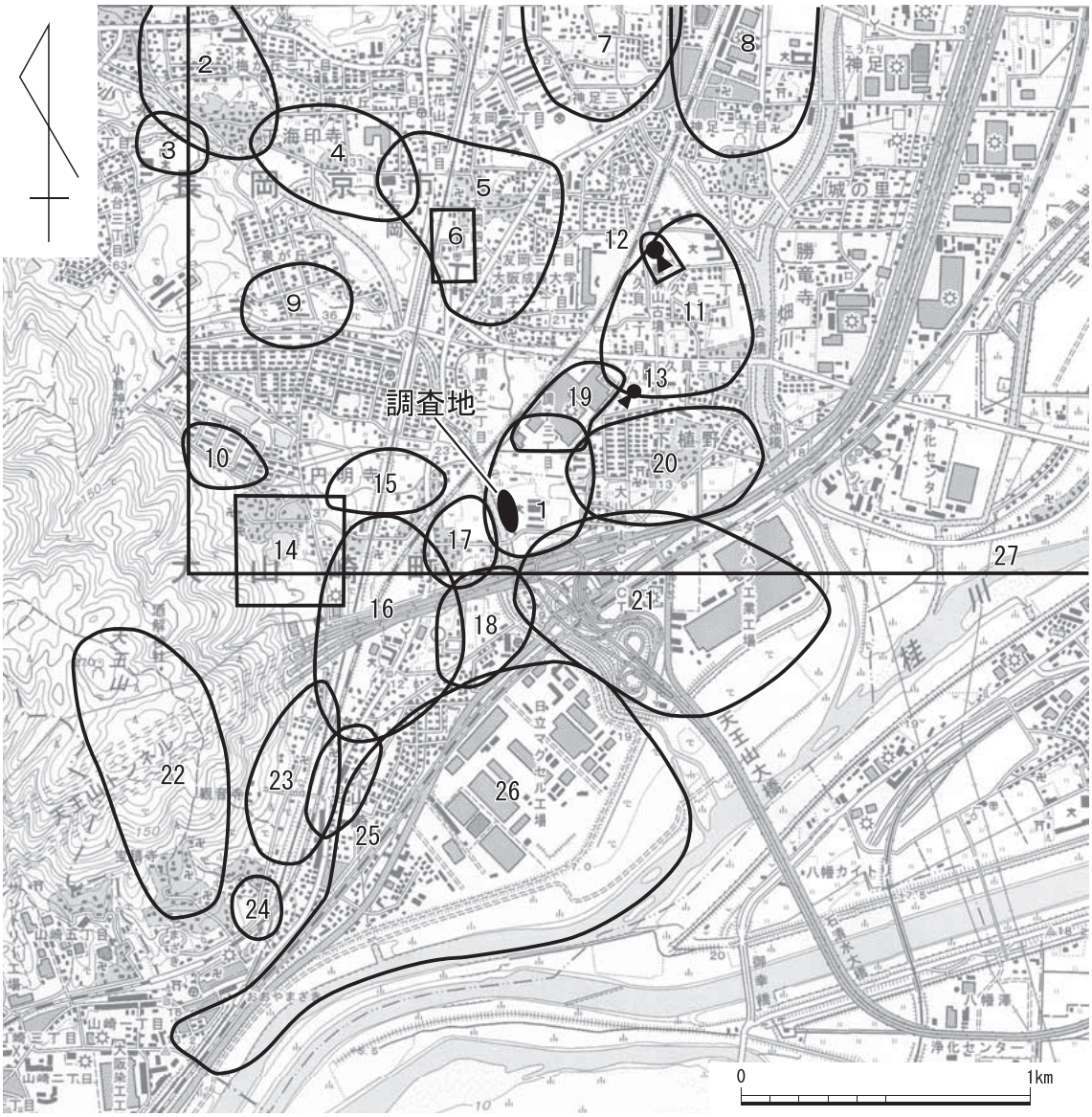
調　査　場　所　乙訓郡大山崎町字円明寺小字松田

現地調査期間　平成22年６月２日～９月29日

調　査　面　積　1,890㎡

２．位置と環境

大山崎町は、京都盆地の南西部に位置し、大阪府との府境に接する。丹波地域から流れる桂川と、琵琶湖からの宇治川と京都府南部から北流する木津川の三川が、大山崎町の南側で合流し、淀川となって大阪湾に流れる。大山崎町西側には、京都盆地を囲む山地の西南部にあたる西山山



第１図　調査地及び周辺主要遺跡分布図(国土地理院 1/25,000 京都西南部・淀)

１．松田遺跡(調査地)	２．下海印寺遺跡	３．西山田遺跡	４．伊賀寺遺跡	５．友岡遺跡
６．鞆岡廃寺	７．開田遺跡	８．神足遺跡	９．脇山遺跡	10．西法寺遺跡
11．南栗ヶ塚遺跡	12．恵解山古墳	13．境野１号墳	14．円明寺跡	15．久保川遺跡
16．百々遺跡	17．金蔵遺跡	18．算用田遺跡	19．硲遺跡	20．宮脇遺跡
21．下植野南遺跡	22．山崎城跡	23．白味才遺跡	24．山崎遺跡	25．堀尻遺跡
26．山崎津遺跡	27．長岡京跡			

地が迫る。山地の裾には丘陵や段丘が分布し、その東側には桂川とその支流である小泉川によって形成された沖積地が広がる。松田遺跡は、小泉川下流の左岸にあたり、その沖積地の中にわずかに広がる河川沿いの微高地上に立地する。(注1)

調査地周辺に分布する遺跡としては、後期旧石器時代にさかのぼるものがある。ＪＲ山崎駅北側の丘陵部に位置する山崎遺跡や天王山東麓の脇山遺跡では、(注2)サヌカイトのナイフ形石器などが出土している。長岡京市に所在する下海印寺遺跡も旧石器時代の遺物散布地として知られる。

縄文時代になると草創期の遺跡である久保川遺跡や、早期の松田遺跡、中期から晩期の縄文土器が出土した下植野南遺跡、中期の友岡遺跡、後期の下海印寺遺跡などがある。これらの遺跡は小泉川付近に集中し、縄文時代には小泉川流域が居住に適した環境であったと推測される。

弥生時代の遺跡では、南栗ヶ塚遺跡から弥生時代前期末の土器が出土し、(注3)中期前葉の方形周溝墓を検出した。(注4)脇山遺跡からは中期前半の土坑などの遺構が検出された。(注5)調査地北方の硲遺跡では中期後半の住居跡群が、南東の下植野南遺跡では中期中葉の方形周溝墓群が検出されている。

古墳時代には、前期後葉に築造された鳥居前古墳や低位段丘上に築かれた前期末の境野１号墳がある。(注6)またこの時期の集落として下植野南遺跡、松田遺跡、算用田遺跡、金蔵遺跡、宮脇遺跡がある。古墳時代後期には、これら複数の遺跡を一括りにする形で一大集落が営まれる。

奈良から平安時代には、神亀２(725)年行基によって、山崎橋が築かれる。天平３(731)年には布教活動の拠点として山崎院が建てられる。山崎国府第１次調査で出土した塼仏は山崎院に使用されていたとされる。延暦３(784)年、桓武天皇によって長岡京遷都が行われる。京域の一部が大山崎町北部にかかり、また、都から西に向かう道路や港の整備が行われたものと推定される。長岡京初期の建物は、難波宮から移設されており、その際に山崎津が港として整備され、荷揚げが行われた。

平安時代には、嵯峨天皇が水無瀬・交野方面に鷹狩りに出かける際に山崎駅に宿泊される。行幸が頻繁になされるようになると、離宮が設けられることとなり、当初は山崎離宮と呼ばれ、次いで河陽離宮と呼ばれた。天皇没後には離宮の利用が減ると、貞観３(861)年には河陽離宮は国府として再利用されるようになる(第４次国府)。第４次国府跡は、ＪＲ山崎駅南の離宮八幡宮付近とされている。平安時代後期には、大山崎地域で荏胡麻油の生産が開始されるようになる。

平安時代前期には２本の道路、久我畷と西国街道が整備されたと推定されている。条里地割りを斜めに横切る久我畷は、平安京の羅城門から南に伸びる鳥羽造道と鳥羽離宮に続く道である。西国街道は、大山崎町から北上し、長岡京市を経て向日丘陵を横切って平安京に通じる道路である。この道路は条里の方向とは異なり、百々遺跡で関連の遺構が確認されている。この遺跡では西国街道の側溝と、道路沿いに道と平行する形で平安時代から中世にかけての建物群や井戸などが見つかっている。(注7)

中世になると油座が結成され、八幡宮を本所とする神人たちが生産と流通を一手に担うようになる。彼らは有力者によって関料免除などの権益を得ている。山崎国府第20次調査では、備前焼の大甕が据え付けられた状態で検出され、甕内の土を成分分析すると、荏胡麻油が貯蔵されてい

たことが判明した。また、現在の円明寺には西園寺公経の別荘円明寺山荘が建てられる。現在の大字円明寺に所在する御茶屋池がその庭園跡とされている。

天正10(1582)年６月２日、明智光秀は京都本能寺で織田信長を倒すと、６月13日には羽柴秀吉は小泉川を挟んで明智光秀と対峙し、明智光秀を倒した。羽柴秀吉は、天王山に空堀と石垣などをもつ城を築いた。またこの頃に千利休が造ったとされる茶室が、ＪＲ山崎駅前の妙喜庵に現存している。

３．調査概要

平成22年４月から現地調査の協議行い、着手のための準備を進めたが、その中で小泉川堤防斜面及び調査対象地内にヒメボタルの生息地が存在することが判明した。同保存協会と協議した結果、６月２日から現地調査を実施することとなった。

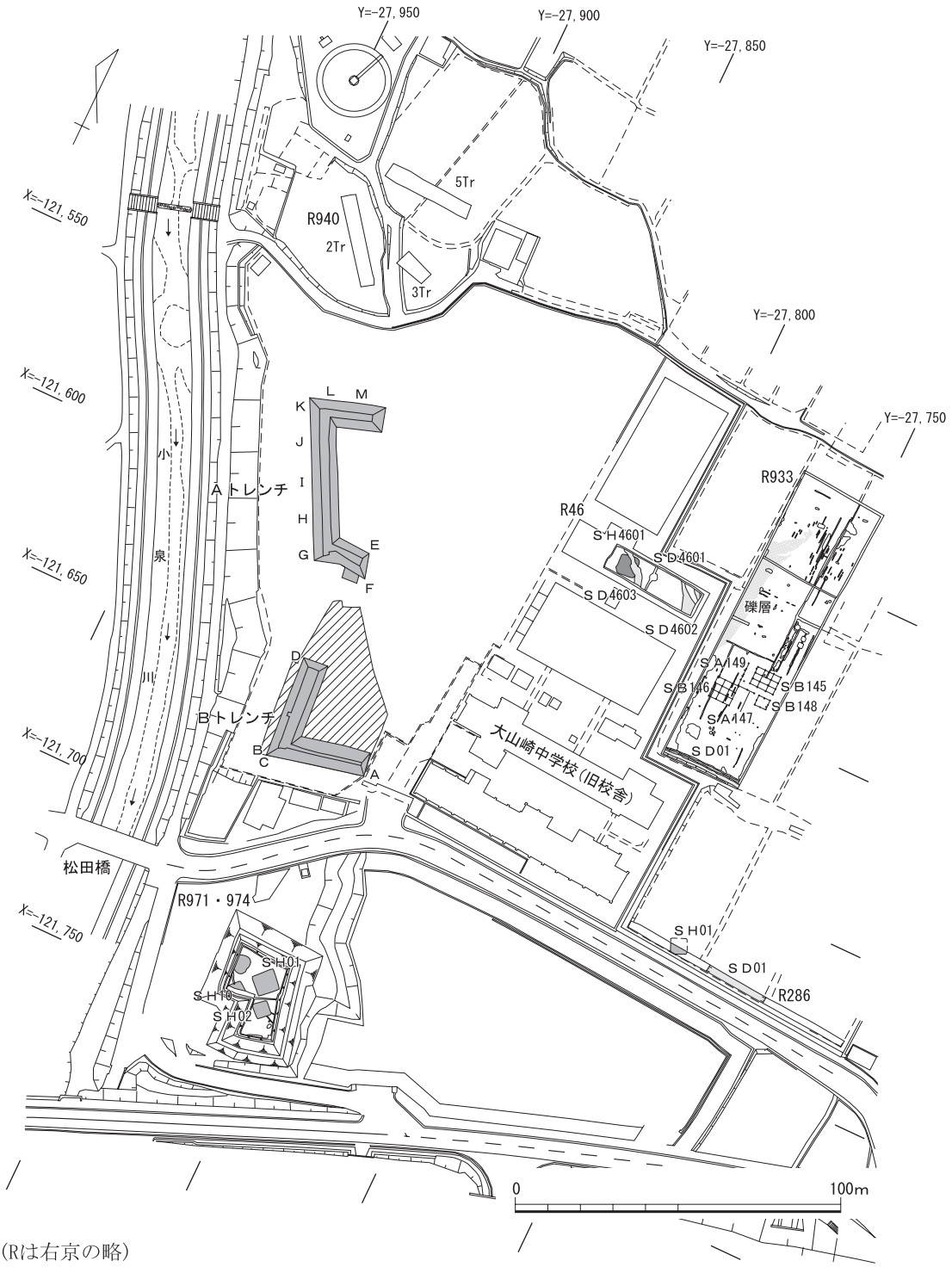
調査は、周辺の調査結果から想定される遺構の広がりの確認やその深さを調べるため、まず大きく２か所にトレンチを設けた。調査対象地の北半部に逆「コ」字状のＡトレンチを、南半部には「Ｌ」字状にＢトレンチを設定した。

Ａトレンチは、地表から約２ｍの深さで重機による掘削を行い、部分的に３か所の深掘りを行った。地表下１ｍ程度で砂層と礫層が互層になって堆積している状況が確認でき、地表から２ｍより下では拳大から頭大の礫が堆積していた。このことから、小泉川の旧流路もしくは氾濫域であったと推定された。遺構は確認できなかった(第３図下図)。また、Ａトレンチ南東隅から灰白色粘質土が認められ、その上に薄く堆積していた灰黄褐色土から瓦器椀や土師器皿の破片が出土した。このことから、この付近より東側では、灰白色粘質土が中世の遺構面になると判断された(第３図上図)。

Ｂトレンチ南壁を第４図に、西壁を第５図に示した。トレンチの「Ｌ」字屈曲部に重機で深掘りを行った。地表から２ｍ以下は、拳大から頭大の礫の堆積(第40層)が認められた。トレンチ断面を精査すると、この礫層上面に柱穴や土坑などの遺構が確認できた。遺構内埋土に瓦器片や土師器片が混入していたことから、この面が中世の遺構面であることがわかった。この層はＢトレンチでは、南北・東西にほぼ水平に広がっていた。Ａトレンチでの状況をふまえて、Ａトレンチ手前までの拡張範囲を設定し(Ｂ拡張区)、面的な調査を行うこととした。調査を進めていくとＢ拡張区南西隅に掘立柱建物跡が存在し、さらに西に延びている可能性があったことから、さらに調査対象地西限まで部分的に拡張を行った。

調査の結果、掘立柱建物跡、柵列、井戸、土坑、流路などで構成された中世の集落の一画を検出した。各遺構ならびに包含層から出土した遺物は、土師器皿や瓦器椀をはじめ青磁や白磁などの陶磁器類、石鍋、銅製の水滴、石製の硯などがあり、13世紀後半から14世紀前半のものが主体であった。

平成22年８月29日に現地説明会を開催し、９月29日をもって調査を終了した。



(Rは右京の略)

(アルファベットは、第３～５図の断面図作成場所)

第２図　松田遺跡調査地配置図

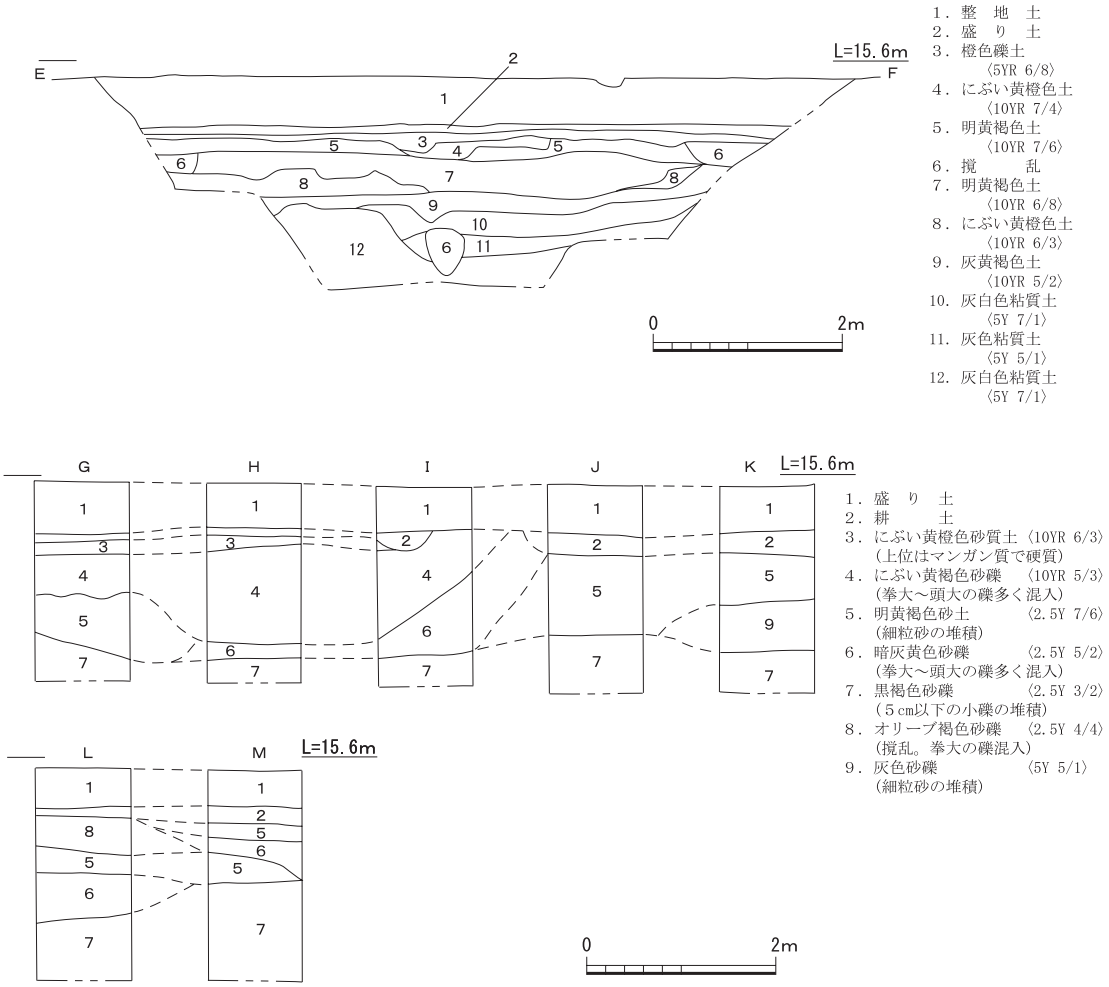
４．層序

Ａトレンチ　調査着手以前は大山崎中学校のグランドであったため、地表下0.5mまでは盛り土であった(第３図下図１層)。その下は旧耕作土(第２層)となる。旧耕作土の下は、砂礫や礫の堆積が続いており、部分的に３か所で重機による深掘りを行ったが、同様の堆積状況であった。その堆積の中で２か所ほど「Ｕ」字状に堆積する。明黄褐色砂土(第５層)を掘り込むもの(第４層)

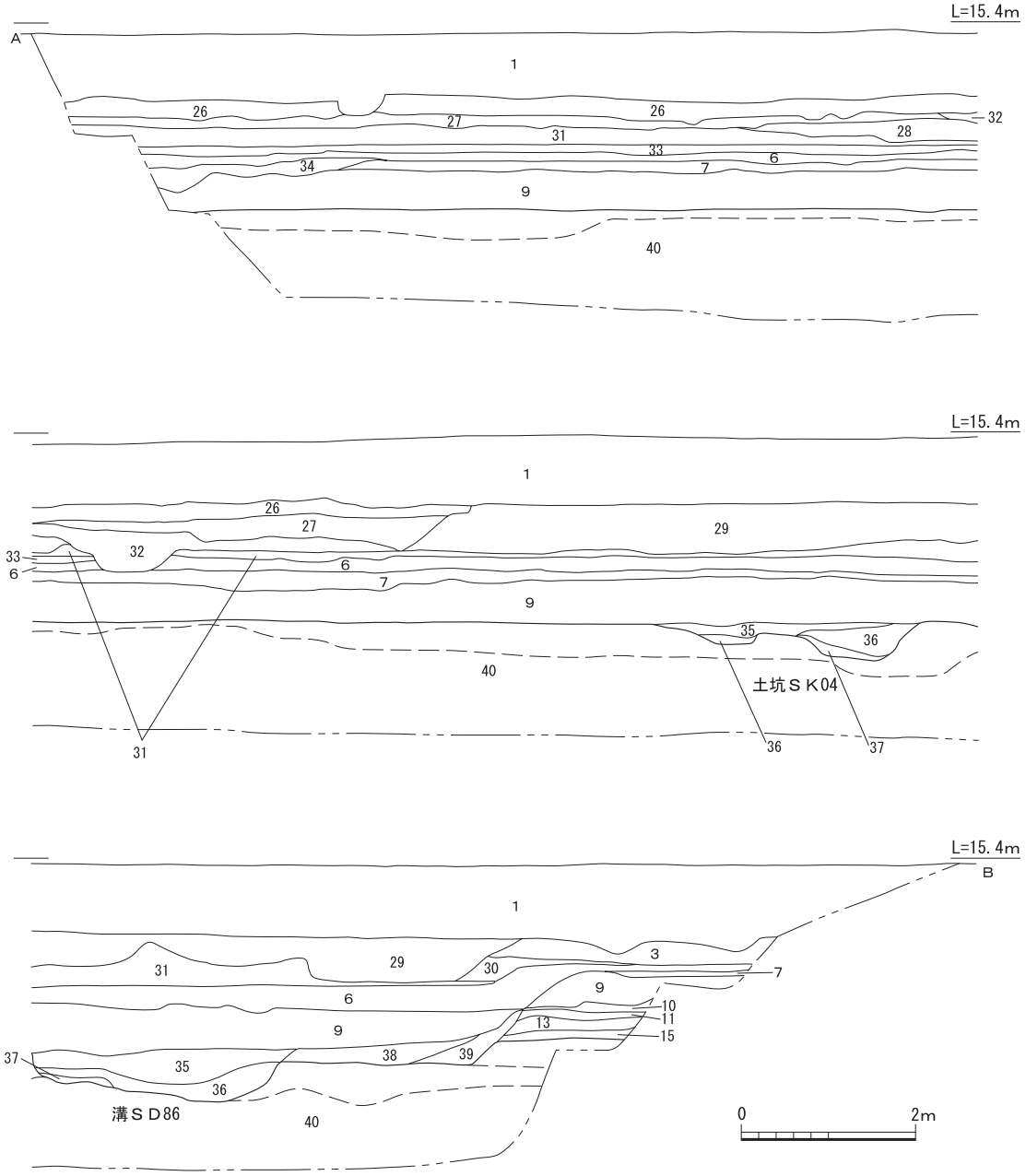
と黒褐色砂礫（第７層）を掘り込む形の流路跡（第６層）である。旧小泉川が時代とともに流域を変えながら堆積していったものと思われる。出土遺物がなく時期については不明である。

Ａトレンチ南東部では、上述のものとは異なる堆積が認められた。砂礫や礫の堆積が見られず、灰白色粘質土が見られる（第10～12層）。標高14.0m付近である。この粘質土は、右京第971・974次では、古墳時代後期の遺構面をなしているベースの土と同色・同質である。Ａトレンチ南東部では、これ（第12層）を掘り込む形で灰白色粘質土や灰色粘質土を埋土とする溝が検出できた（第10・11層）。この溝の上を遺物包含層である灰黄褐色土が覆っていた（第９層）。遺構埋土である灰白色粘質土と灰黄褐色土からは瓦器椀や土師器皿の破片が出土した。このことから、ここで検出した溝は中世の溝と考えたが、調査地東端をかすめる形で検出したため、全容を把握することはできなかった。

Ｂトレンチ（第４・５図）　中世の遺構は、灰オリーブ色砂礫を掘り込む形で柱穴、溝や土坑などを検出した。遺構面は、標高13.3mである。東西方向の断面観察では、遺構面直上に堆積した灰黄色砂土（第９層）には瓦器椀や土師器皿の破片が混入していた。土坑ＳＫ04や溝ＳＤ86がこの断面にかかる。また、西端は旧小泉川の左岸にあたるためか、0.8mほどの盛り土（第９～11・

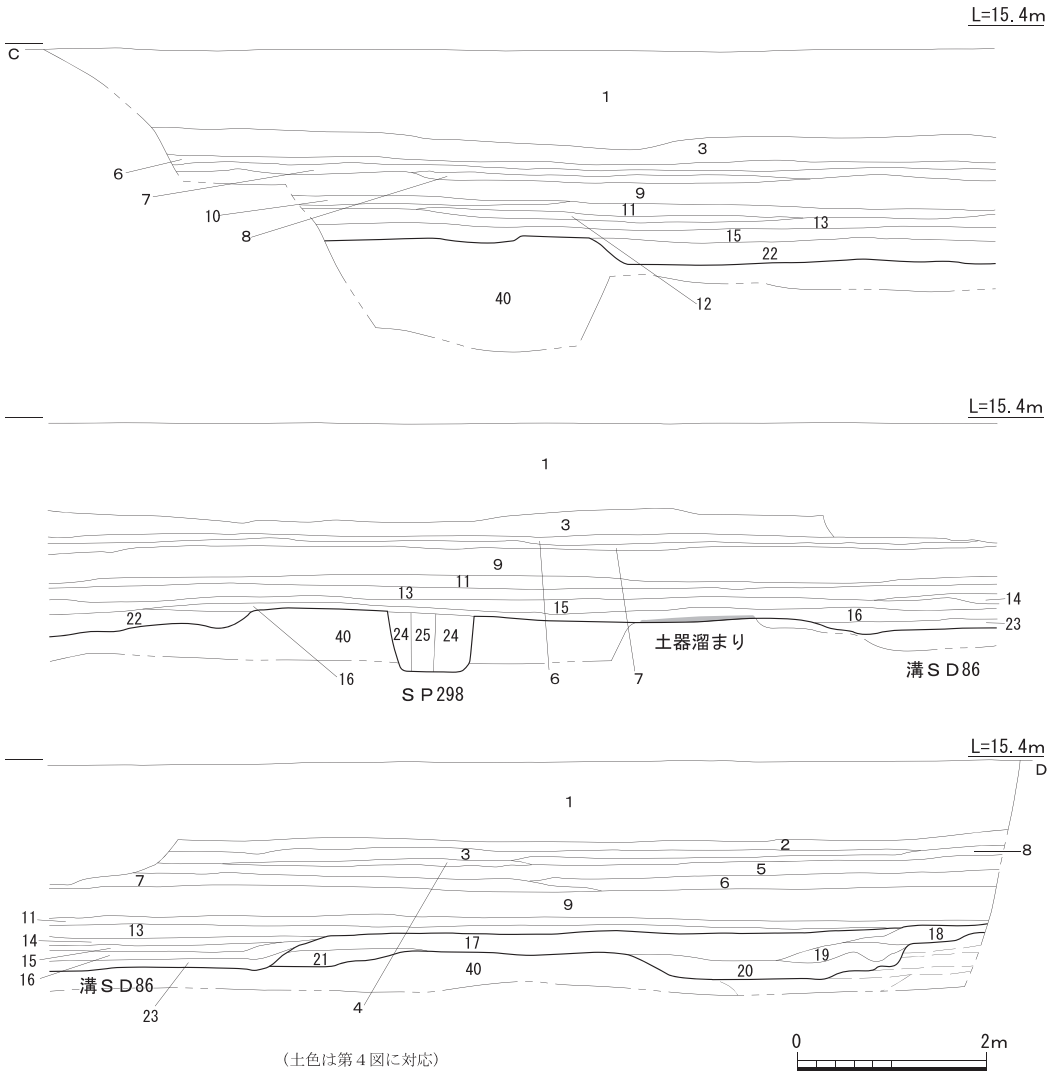


第３図　Ａトレンチ土層断面図



1．盛り土
2．旧耕土
3．オリーブ灰色砂土 〈5GY 6/1〉
4．黄褐色砂質土 〈10YR 5/6〉
5．オリーブ灰色砂土 〈5GY 6/1〉
6．明黄褐色砂質土 〈10YR 6/6〉
7．褐灰色砂礫 〈10YR 5/1〉（３～８cm大の礫混入）
8．にぶい黄褐色砂礫土 〈10YR 5/3〉
9．灰黄色砂土 〈2.5Y 6/2〉（細粒砂の堆積）
10．明黄褐色砂質土 〈10YR 6/6〉
11．褐灰色砂礫 〈10YR 5/1〉（３～８cm大の礫混入）
12．明黄褐色砂質土 〈10YR 6/6〉
13．黄褐色砂質土 〈10YR 5/8〉（マンガン質でかなり硬質）
14．黄褐色砂質土 〈10YR 5/6〉（上位がマンガン質のため硬質）
15．褐色砂礫土 〈10YR 4/4〉（５cm程度までの礫混入）
16．灰黄褐色砂礫土 〈10YR 4/2〉（３cm程度までの礫混入）
17．黄褐色砂土 〈2.5Y 5/6〉
18．にぶい黄褐色砂質土 〈10YR 5/3〉
19．褐色砂質土 〈10YR 4/4〉
20．にぶい黄褐色砂質土 〈10YR 5/3〉
21．オリーブ褐色砂質土 〈2.5Y 4/6〉
22．灰色砂 〈10Y 6/1〉
23．褐色砂質土 〈10YR 4/4〉
24．灰黄褐色砂礫土 〈10YR 4/2〉
25．にぶい黄褐色砂礫土 〈10YR 5/4〉
26．暗オリーブ色砂質土 〈5Y 4/3〉
27．にぶい黄色砂土 〈2.5Y 6/3〉
28．オリーブ褐色砂質土 〈2.5Y 4/5〉
29．灰黄褐色砂礫 〈10YR 5/4〉（５mm以下の小礫多量に混入）
30．にぶい黄褐色砂礫土 〈10YR 5/4〉（５cm以下の礫少量含む）
31．灰オリーブ色砂土 〈5Y 5/2〉
32．暗灰黄色砂土 〈2.5Y 4/2〉
33．明黄褐色砂質土 〈10YR 7/6〉
34．にぶい黄橙色土 〈10YR 7/4〉（拳大の礫混入）
35．黄灰色砂質土 〈2.5Y 5/1〉
36．黄褐色粗砂 〈2.5Y 5/3〉
37．黄灰色砂質土 〈2.5Y 5/1〉
38．灰色砂質土 〈N 6/〉
39．オリーブ灰色粗砂 〈5GY 5/1〉
40．灰オリーブ色砂礫 〈5Y 4/2〉（２cm～拳大の礫多量に混入）

第４図　Ｂトレンチ土層断面図（１）



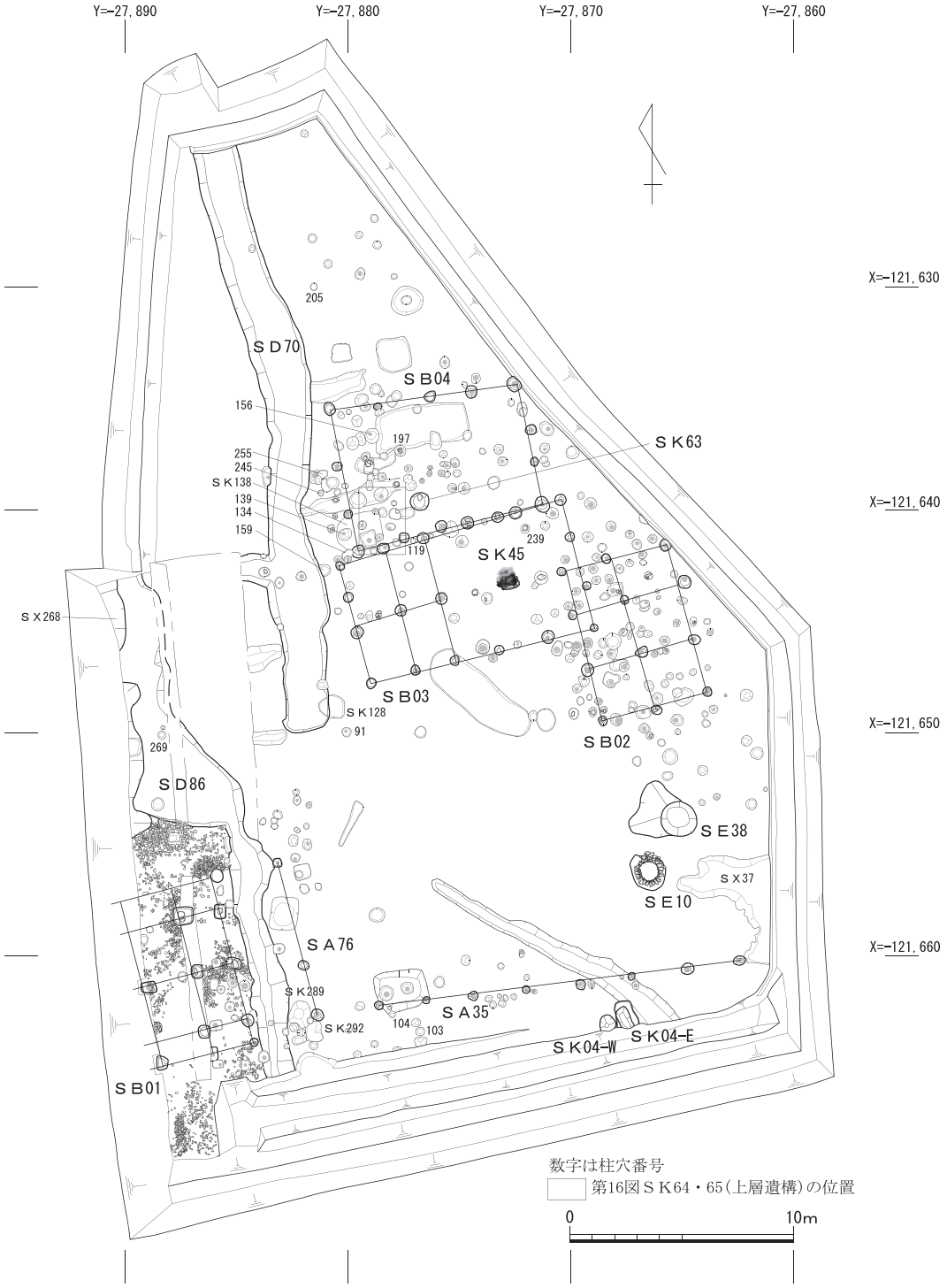
第５図　Ｂトレンチ土層断面図（２）

13・15層）が認められ、土手状になっていたと思われた。盛土内からの遺物の出土はないが、層位から中世以降のものと考える。南北方向の断面では、わずかな高まりと一辺0.9mを測る柱穴掘形（ＳＰ298）を確認した。またトレンチ内では、平面形が方形の掘形内に根石と判断される石をもつ柱穴（ＳＰ257・260）を検出した。この近辺には、これらの柱穴で構成される掘立柱建物跡が存在すると想定でき、さらに西方に延びることから、調査対象地西限まで部分的に拡張を行った。遺構面直上から部分的に遺物が集中するか所が認められた（ＳＸ02・ＳＤ86肩部付近）。Ｂトレンチ北端の狭小な範囲では遺構面２面を検出した。出土遺物から、上面が14世紀前半、下面が13世紀後半であった。土坑ＳＫ64・65は上面から掘り込む遺構である。

５．検出遺構（第６図）

検出した主要遺構は、掘立柱建物跡４棟、柵列２条、井戸２基、土坑５基、溝２条、その他柱穴群である。これらの遺構は概ね同一面から検出されたが、部分的に20cmほど上から掘り込む遺構も存在した。

掘立柱建物跡ＳＢ01（第７図）　Ｂ拡張区南西隅から検出した掘立柱建物跡である。建物周囲の柱穴掘形は、平面形が円形あるいは隅丸方形で、一辺あるいは直径が0.4 ～ 0.7m、深さは約0.2mと浅い。中央寄りの柱穴掘形は平面形が隅丸方形で、一辺0.5 ～ 0.9m、深さ約0.5mと深く、根石を敷くものもあった。柱当たりは径0.2mである。建物本体としては東西１間（2.3m）以上×南北２間（5.1m）で、北・東・南に庇が付くと考えた。主軸方向は、N14°Wである。柱穴内から瓦



第６図　遺構配置図

第７図　掘立柱建物跡ＳＢ01、柵列ＳＡ76、溝ＳＤ86実測図

器や土師器片の他、須恵器鉢(32)や瓦質の羽釜(33)や石鍋(34)が出土した。

この建物の東・北側を区画する形で溝ＳＤ86が逆「Ｌ」字に設けられ、さらに東側には建物に平行して柵列ＳＡ76が配される。建物東側は溝ＳＤ86と接しているが、北・南側には一定の空閑地が存在し、拳大の礫が敷かれた状況である。この礫は、小泉川の氾濫によるものではなく、ＳＤ86で区画された内側に集中し、一定の大きさの石で面をなしていること、その範囲は周囲より若干高くなっていることから、意図的に敷かれたものと判断される。

建物跡北東側からは、土師器皿を主体とする遺物が南北1.5m、東西1.0mの範囲に集中した状況で、２か所で検出した。正位置で重なって出土する皿もあった(第８図)。

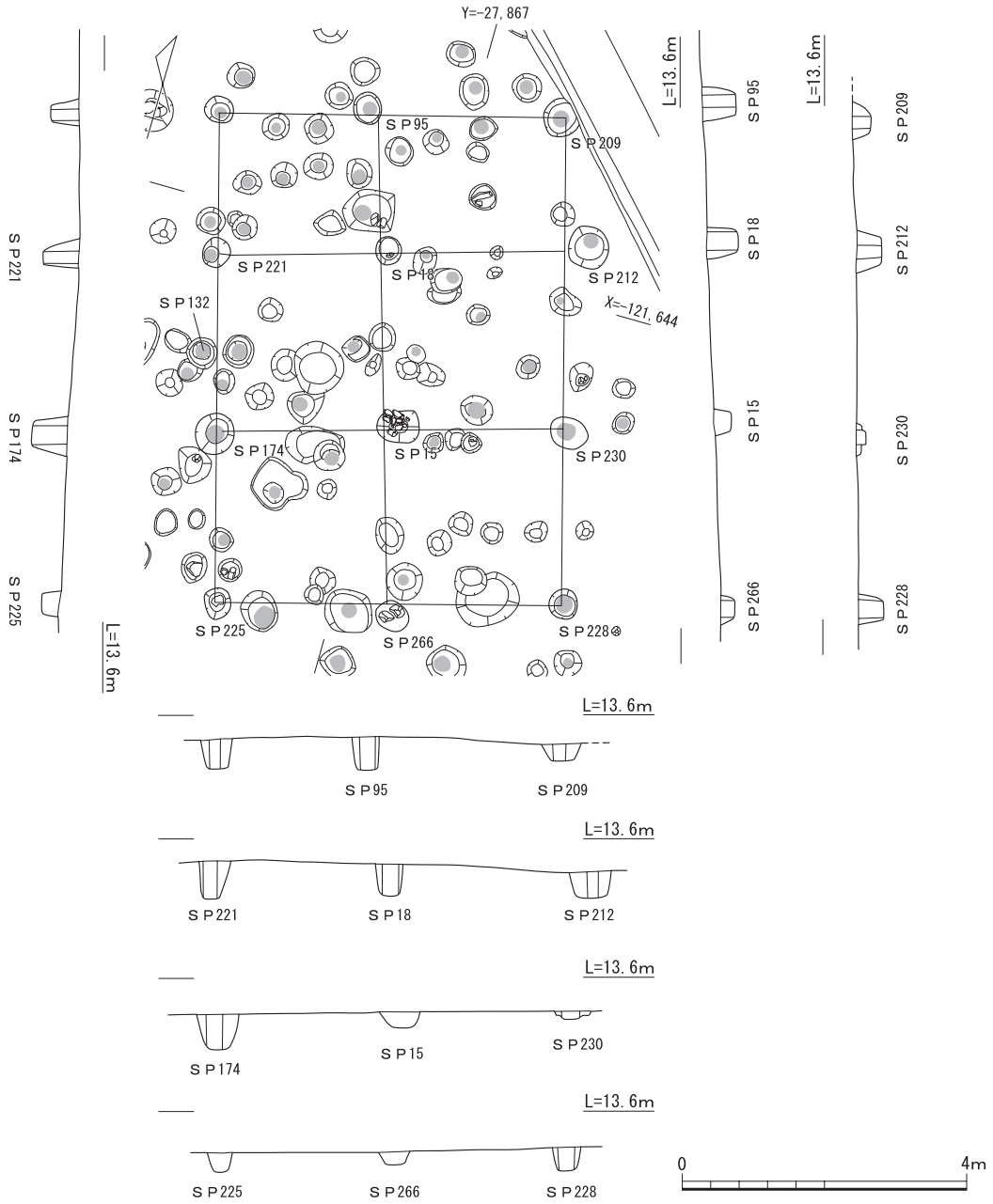
溝ＳＤ86(第７・８図)　掘立柱建物跡ＳＢ01の北側から東側にかけて、逆「Ｌ」字状に掘削された溝である。規模は、幅0.6～1.8m、深さ0.1～0.3m、N12°Wである。断面Ｕ字状を呈することから溝としたが、溝底に凹凸が見られることや底面が一方向の傾斜をなさないことから、排水施設でなく、建物を区画する施設であったと思われる。この落ち込み内やその肩部付近からまとまって遺物が出土した(第８図)。出土遺物は、土師器皿をはじめ瓦器椀や須恵器や白磁など

第８図　掘立柱建物跡ＳＢ01周辺遺物出土状況図

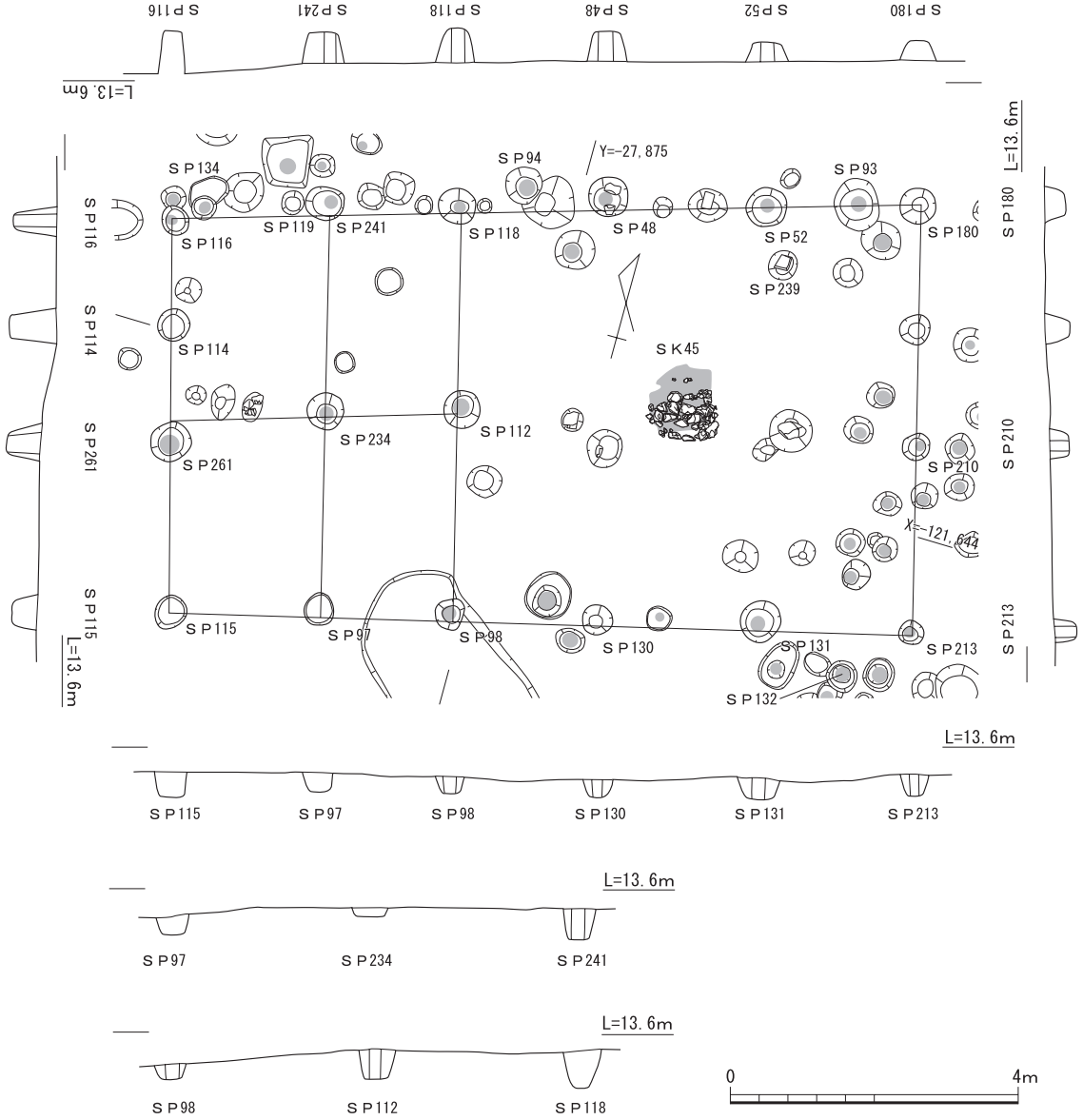
(43～84)がある。ＳＤ86肩部付近から出土した遺物は、ＳＢ01とＳＤ86の間に敷き詰められたと考える拳大の礫の隙間に、正位置や裏向けに重なるように出土する特徴が見られた。この地点は、ＳＢ01の北東部あるいは北辺部付近となり、ＳＢ01の艮の方角、鬼門にあたることから、掘立柱建物跡ＳＢ01で実施された祭祀に関わる可能性もある。

柵列ＳＡ76(第７図)　掘立柱建物跡ＳＢ01の東辺から東に3.0mの所で検出した、南北方向の柵列である。建物と平行関係にある。一部後世の撹乱で削平されていたが、３間(7.0m)分を検出した。主軸方向は、N15°Wである。柱穴の掘形は円形で、径約0.5m、深さ約0.2mである。柱痕は径0.2mである。

掘立柱建物跡ＳＢ02(第９図)　調査地中央東側で検出した南北棟の掘立柱建物跡である。Ｓ



第９図　掘立柱建物跡ＳＢ02実測図

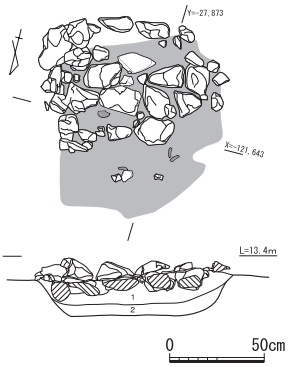


第10図　掘立柱建物跡ＳＢ03実測図

Ｂ02の北西角がＳＢ03の南東角に重複する。東西２間(4.8m)×南北３間(7.0m)の総柱建物で、柱穴掘形は円形で、径0.4～0.6m、深さ0.2～0.5mを測る。柱痕は、径0.2～0.3mである。主軸方向は、N15°Wである。柱穴内から瓦器や土師器片が出土したが、図示できるものはなかった。

掘立柱建物跡ＳＢ03(第10図)　調査地中央で検出した東西棟の建物である。東西５間(10.3m)×南北２間(6.0m)である。柱穴ＳＰ234・112が検出できたことから、建物跡西側の東西２間(4.0m)×南北２間(5.5m)は、床貼りと考えられる。建物東側の東西３間(6.3m)×南北２間(6.0m)は、中央部で柱穴が検出できなかったことから、土間であったと考える。この土間の中央から配石遺構ＳＫ45を検出した。柱穴掘形は円形で、径0.4～0.6m、深さ0.2～0.6mを測る。柱痕跡は、径0.2～0.3mである。主軸方向は、N77°Eである。柱穴内から瓦器や土師器片が出土し、図示できたものは土師器皿(９)のみである。

この建物は、掘立柱建物跡ＳＢ02・04と重複するが、柱穴の切り合い関係がなく、出土遺物に



1．炭混じり暗茶褐色土
2．茶褐色砂質土

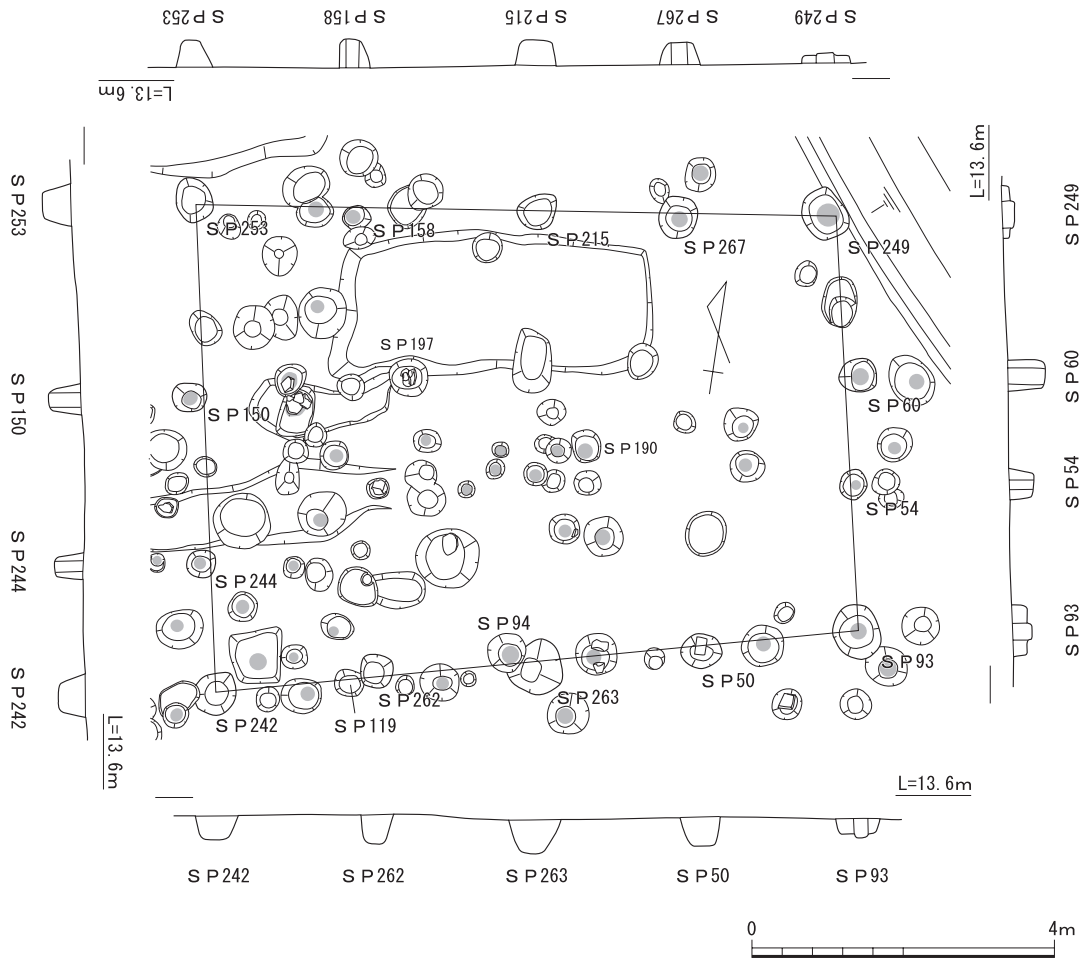
第11図　配石遺構
ＳＫ45実測図

時期差が認められないことから、その構築順は不明である。

配石遺構ＳＫ45（第10・11図）　掘立柱建物跡ＳＢ03の土間の中央で検出した遺構である。一辺0.85mの遺構で、建物跡に平行して設けられていた。南半分は扁平な石を敷き詰め、南辺・東辺の石は立てていた。石の上面は火を受けて赤色に変色しており、石の隙間には炭が堆積していた。このような状況から、炉であったと考える。配石上面から、土師器皿・高台付皿、瓦器椀（35～42）が出土した。敷き詰められた石礫は、チャート・砂岩などの堆積岩で、チャートが主体をなす。礫は亜円礫に限られ、形状は箱形のものが多く、選択して搬入されたと思われる。

構築時には、一辺1.0m、深さ0.2mの方形の穴を設け、炭混じり暗茶褐色土・茶褐色砂質土を敷き、上面に石を配する。周辺の柱穴内の根石に、火を受けたものが存在したことから、ＳＢ03解体時に石が一部抜かれ、新たな建物を建設する際に柱穴の根石などに再利用されたと思われる。

掘立柱建物跡ＳＢ04（第12図）　掘立柱建物跡ＳＢ03の北側で検出した。ＳＢ03の北辺がＳＢ



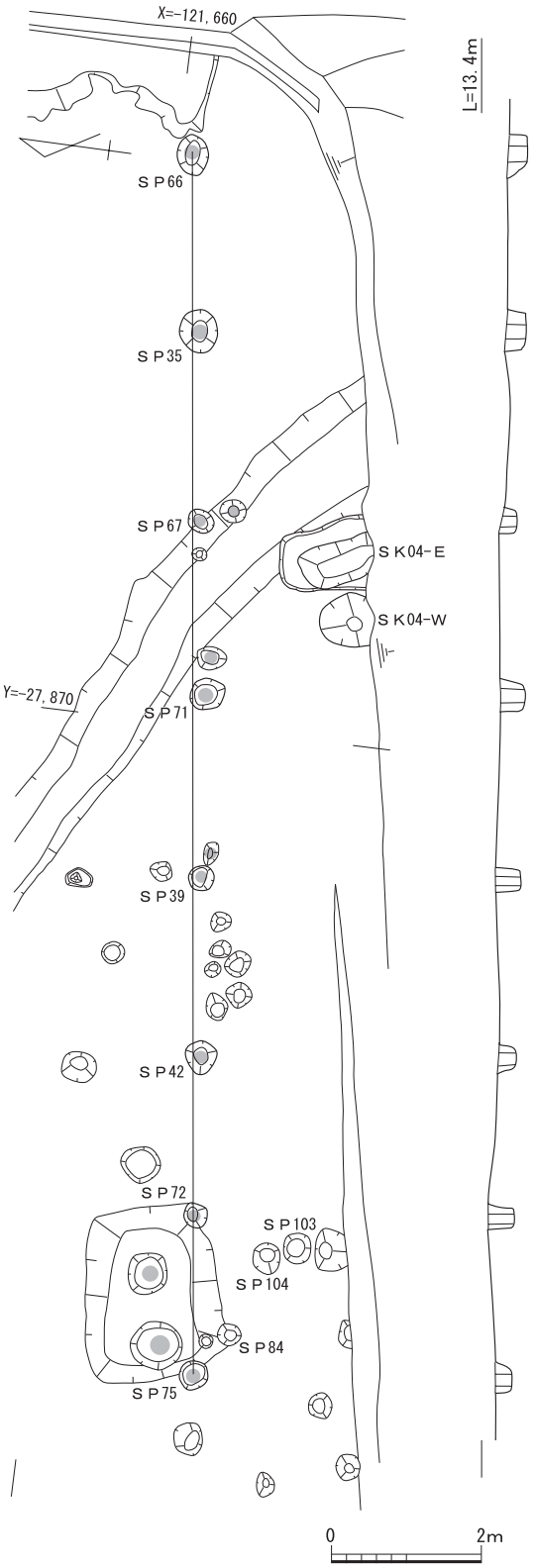
第12図　掘立柱建物跡ＳＢ04実測図

04の南辺と重複する。東西４間(8.5m)×南北３間(6.4m)である。柱穴掘形は円形で、径0.4～0.7m、深さ0.2～0.5mを測る。柱痕跡は、径0.2～0.3mである。主軸の方向は、N82°Eである。柱穴内からは瓦器や土師器片が出土したが、図示できたのは瓦器椀(28～30)だけである。高台が低く、内面底部にわずかな暗文が認められるなど、14世紀前半のものと考えられ、掘立柱建物跡４棟の中では最も新しいと考える。

柵列ＳＡ35(第13図)　調査地南側で検出した東西方向の柵列である。確認したのは７間分で16.3mを測る。柱間は、2.1～2.4mである。さらに東方に延びる可能性もある。柱穴掘形は円形で、径0.3～0.5m、深さ0.2～0.3mであった。主軸方向はN84°Eである。柵列ＳＡ76と「Ｌ」字に屈曲する柵列の可能性もあるが、柵列ＳＡ35の西端のＳＰ75と柵列ＳＡ76の南端のＳＰ76の間が2.7mと他の柱間隔より広いことから別の柵列と考えた。

柱穴群(第14図)　今回の調査で検出した掘立柱建物跡周辺からは数多くの柱穴を検出した。これらの柱穴群は、掘立柱建物跡や柵列など明確な遺構としては復原できなかったが、中には柱抜き取り穴に瓦器椀や土師器皿がほぼ完形品の状態で埋納されたものや、扁平な石を根石とする柱穴、柱穴の埋土上面に根石を設けたものなどがある。遺物が埋納された柱穴については、建物の建て替えや移築に関連して祭祀が営まれた結果と考える。

柱穴ＳＰ91やＳＰ134からは、柱抜き取り後にほぼ完形品の瓦器椀や土師器皿が埋納されていた。ＳＰ91は、瓦器椀４点(20～23)を立てて向かい合わせにし、その中に土師器皿を数点立てた状況であった。ＳＰ134は柱穴検出面か

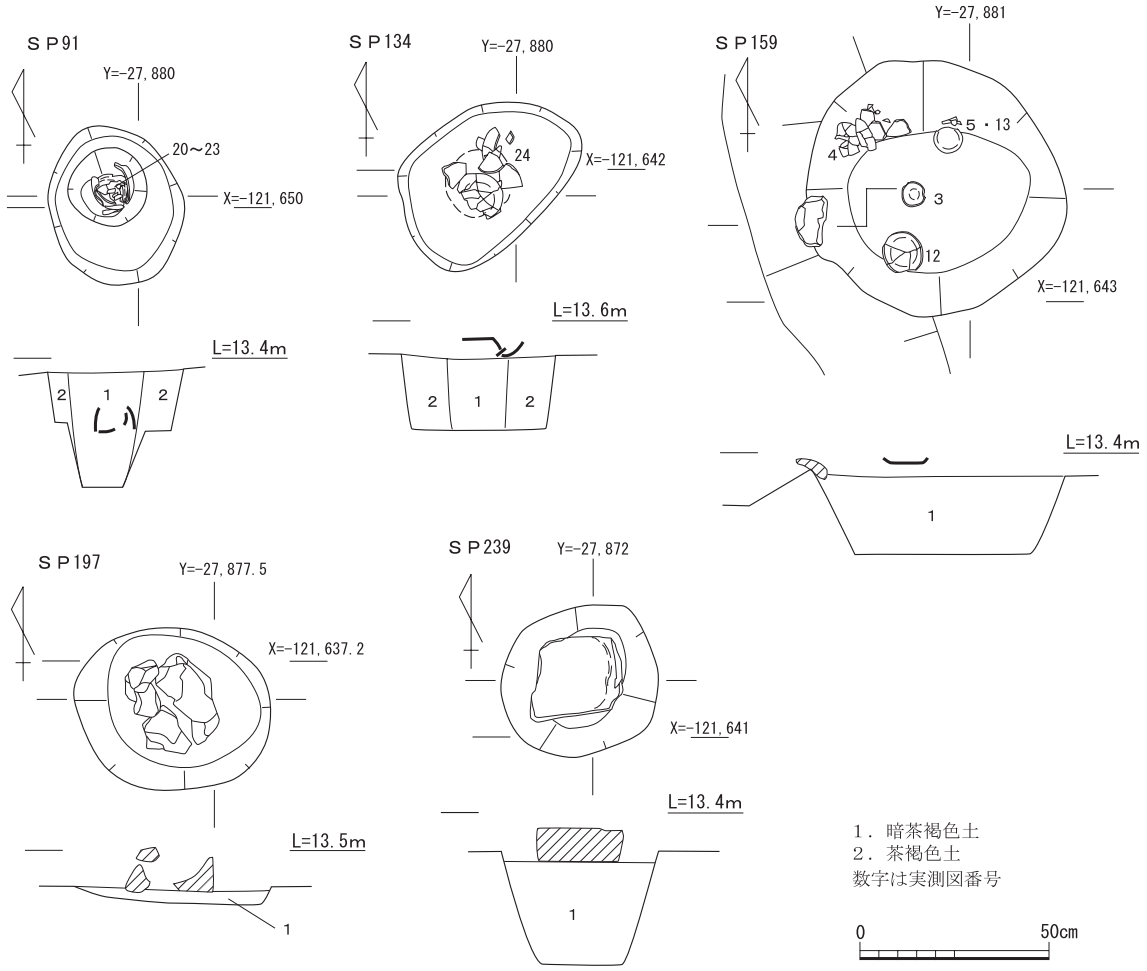


第13図　柵列ＳＡ35実測図

ら瓦器椀や土師器皿が出土した。これらは掘形からでなく、柱痕跡の埋土中からの出土であった。柱穴159は柱痕跡を確認できなかったが、柱穴検出面から土器片（３～５・12・13）が認められた。

柱穴ＳＰ197は、今回検出した根石をもつ柱穴の中で唯一凝灰岩を根石とするものであった。根石中央部が凹状に窪む。また、半球面上に窪んだ、マンガン質に変化した土の塊が柱穴底面に存在するものもあった。これは、柱穴掘形内に柱を立て、柱底面に接する土が長年の月日でもってマンガン質に硬化し、それが残った結果と考える。また柱穴ＳＰ239から検出した根石は砥石を再利用したもので、柱穴底面での検出ではなく、底面から25cm上の柱穴検出面に据わっていた。このような柱穴が他にも存在したことから、建て替え時に新たに柱掘形を掘るのではなく、建て替え前の旧い柱穴を再利用したものと推察する。その際に、根石の高さを上下に置いて調整したために、柱穴の中で根石が底面にあったり、25cmほど浮いたのではないかと考える。

井戸ＳＥ10（第15図）　調査地南東部から検出した石組みの井戸である。拳大から頭大の自然石を積み上げていた。平面形は、上面では円形で、下段に近づくほど方形となる。掘形は円形で、上面では径1.7m、石組み最下段付近では径1.5mを測る。井戸の規模は、上面では径0.8m、下段では一辺0.75m、深さ1.4mを測る。石組み下の井戸最下段には、一辺0.9m、深さ0.3mの方形の坑が設けられ、その掘形に沿う形で幅0.2mの板材を検出した。板材は石組みに沿って方形に組

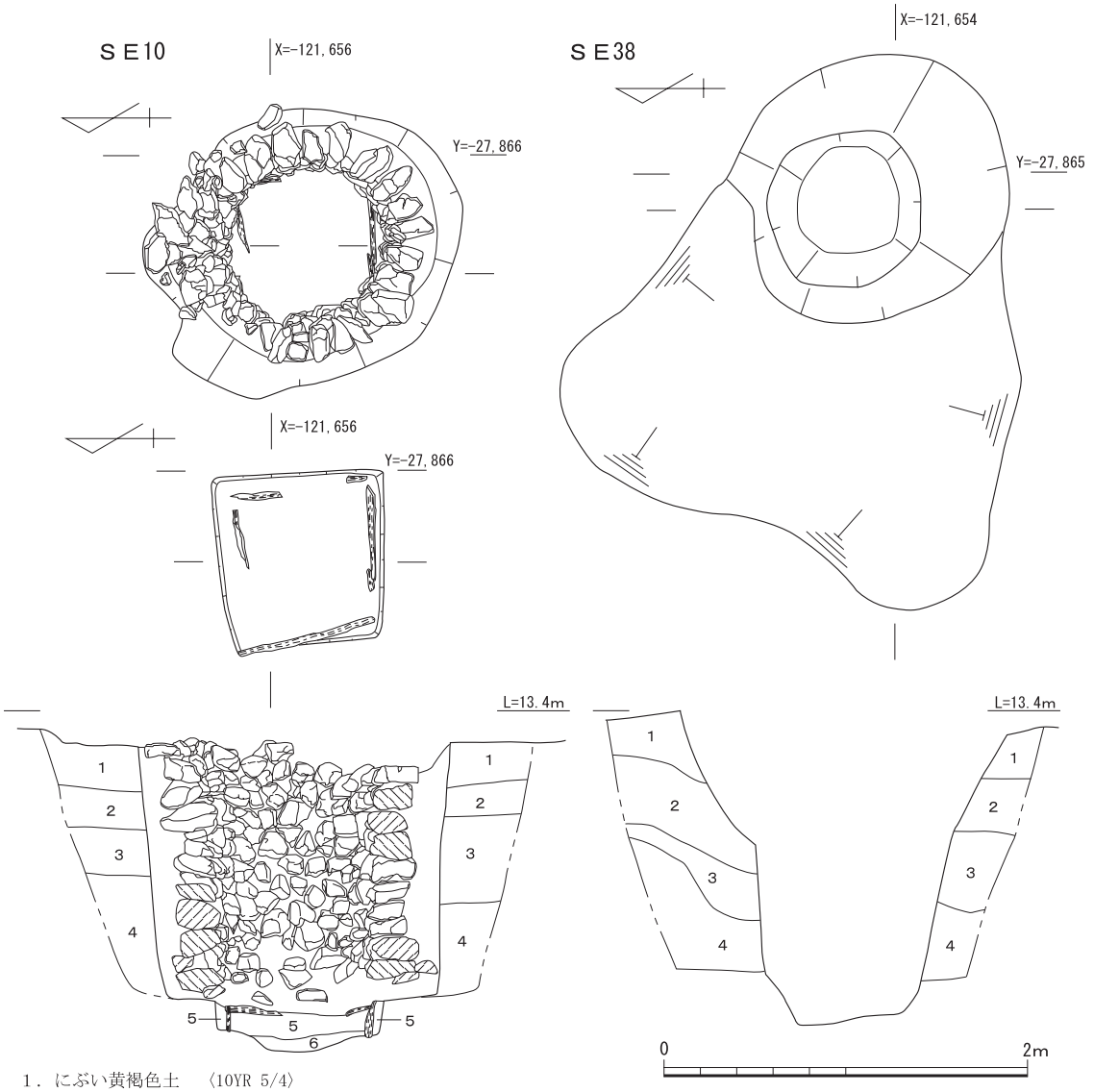


第14図　柱穴内遺物・根石検出状況図

まれていたようであるが、検出時は土圧で崩れていた。方形に組まれていた板材の内側には明緑灰色粘土や緑灰色粘砂が堆積しており、この付近まで水が溜まっていたと思われる。埋土中から瓦器や土師器の破片など(85・89・92・93・96)が出土した。瓦器椀(89)の年代観から、14世紀前半の井戸と考える。

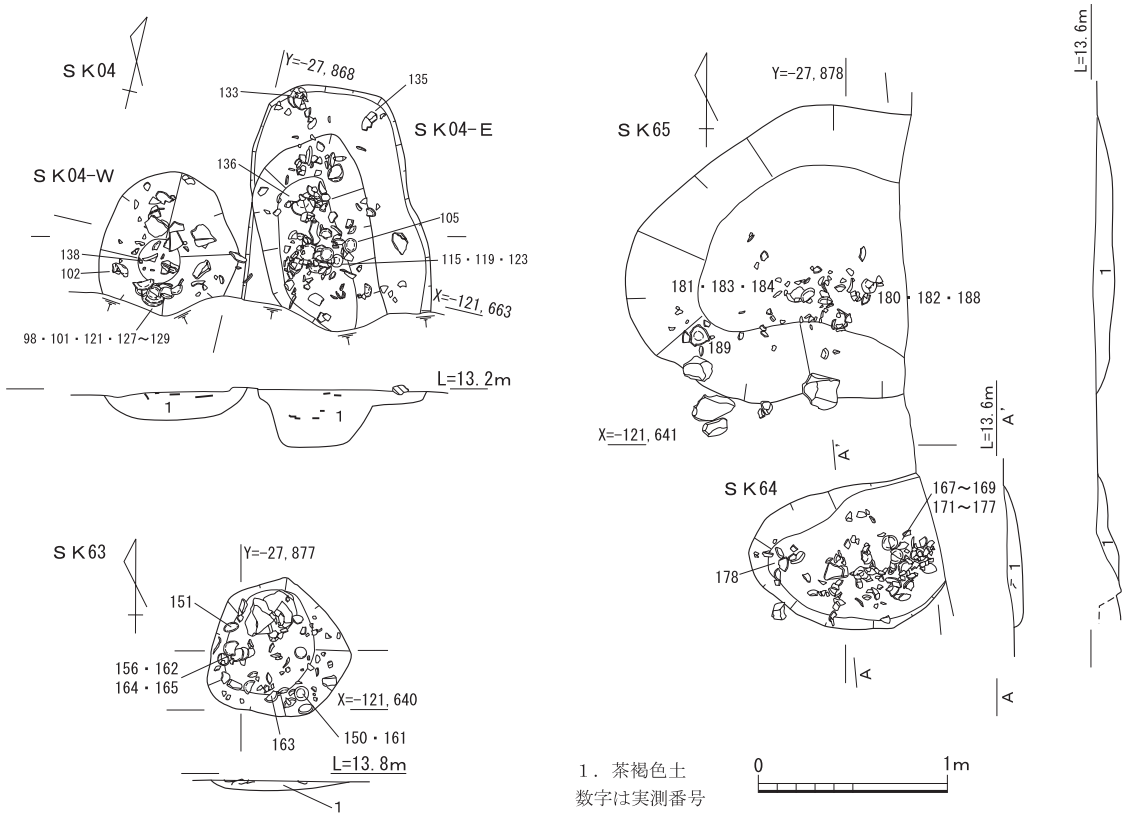
井戸ＳＥ38(第15図)　調査地南東部、井戸ＳＥ10の北側に並んで検出した素掘りの井戸である。平面は円形である。井戸掘形の上部西側が大きく崩壊していた。井戸下部での規模は径1.0m、検出面からの深さは1.6mである。埋土中から緑釉陶器・瓦器・土師器など(86～88・90・91・94・95)が出土した。13世紀後半の井戸と考える。

土坑ＳＫ04(第16図)　調査地南側、柵列ＳＡ35の南側で検出した土坑である。検出時には１基の土坑として調査を進めたが、掘り下げるにしたがって、２基の土坑が隣接していることがわかった。出土遺物も当初はＳＫ04として取り上げたが、状況が明らかになるにしたがってＳＫ04



1．にぶい黄褐色土　〈10YR 5/4〉
　(人頭大の礫混入)
2．褐　色　土　〈10YR 4/6〉
　(３～10cm大の礫混入)
3．にぶい黄褐色砂質土　〈10YR 4/3〉
　(人頭大の礫若干混入)
4．暗　褐　色　砂　土　〈10YR 3/3〉
5．明緑灰色粘土　〈7.5GY 7/1〉
6．緑灰色粘砂　〈7.5GY 6/1〉

第15図　井戸ＳＥ10・38実測図



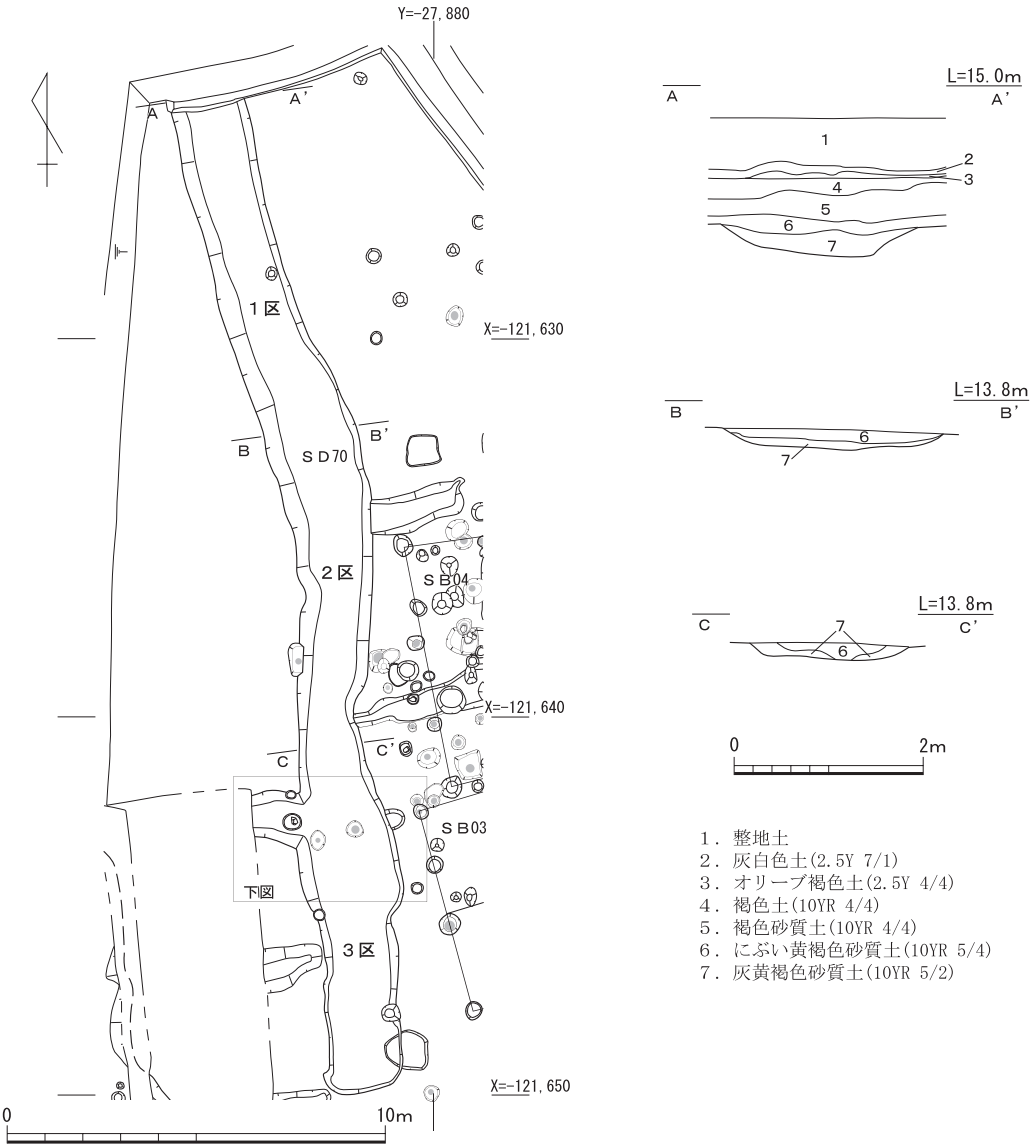
第16図　土坑ＳＫ04・63～65実測図

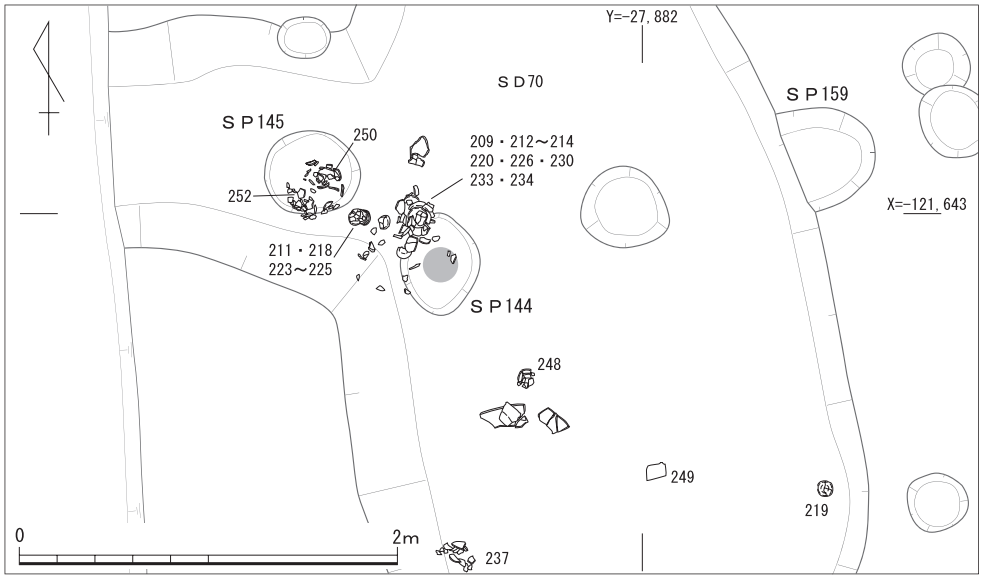
－Ｅ・Ｗとして取り上げた。その規模は、ＳＫ04－Ｅが短辺1.0m、長辺1.3m以上、深さ0.3mを測る、長楕円形の土坑である。ＳＫ04－Ｗは短辺0.7m、長辺0.75m以上、深さ0.15mを測る、楕円形の土坑である。両土坑は同一面で検出でき、出土遺物に時期差がないことから、同一時期の遺構と考える。また両土坑からは多量の土器(97～138)が出土した。その大半は土師器皿である。その出土状況は、ほぼ完形品の皿が正位置に重なる形もしくは、正位置の土師器皿の上に裏向けの皿が重なるなどの状況であった。その様相から廃棄した状況でなく人為的に土坑に入れられ状況である。何らかの祭祀に伴って埋納もしくは、片付けられた可能性が高い。瓦器椀(133～136)の出土により、14世紀前半の土坑と判断される。

土坑ＳＫ63(第16図)　調査地中央部で検出した円形の土坑である。径0.7m、深さ0.05mを測る。この土坑からは、多量の土師器皿とわずかな瓦器椀が破片の状態で出土した。調査後、出土遺物を接合するとほぼ完形品になるものが多いことから(148～166)、この土坑は廃棄土坑であったと判断される。瓦器椀(166)の出土により、14世紀前半の土坑と考える。

土坑ＳＫ64(第16図)　調査地中央で検出した土坑である。Ｂトレンチ北端については土坑ＳＫ64・65付近までの狭小な範囲で遺構面２面を確認することができた。土坑ＳＫ64・65は、この上面で検出した遺構である。

土坑の規模は、長辺1.0m以上、短辺0.8mの長楕円形で、深さ0.1mである。埋土中から土師器や瓦器の破片が出土した(167～179)。これら破片は整理時にかなり接合できたことなどから、廃棄されたものと推測される。瓦器椀の形状などから、13世紀後半と考える。





第17図　溝ＳＤ70実測図

土坑ＳＫ65（第16図）　ＳＫ64に隣接して、北側で検出した楕円形の土坑である。規模は、長辺1.5m以上、短辺1.5m、深さ0.1mを測る。埋土中から、土師器・瓦器・青磁などの破片が出土した（180 ～ 189）。これらの遺物は、ＳＫ64と同じく廃棄されたものと思われる。時期もほぼ同時期である。

土坑ＳＫ128（第６図）　調査地中央付近から検出した不定形な土坑である。長辺1.3m、短辺1.1m、深さ0.2mを測る。溝ＳＤ70に切られていた。瓦器椀（145 ～ 147）が出土した。その形状から13世紀後半と考える。

土坑ＳＫ138（第６図）　調査地中央部、掘立柱建物跡ＳＢ04西辺付近で検出した、不定形な土坑である。長辺2.1m、短辺1.5m、深さ0.2mを測る。瓦器椀をはじめとして、白磁や天目茶碗などが出土した（139 ～ 144）。瓦器椀は、13世紀後半である。

土坑ＳＫ289（第６図）　調査地南西部、掘立柱建物跡ＳＢ01東側から検出した、不定形な土坑である。長辺1.1m、短辺0.9m、深さ0.5mである。須恵器皿、土師器皿、瓦器椀、羽釜などが出土した（190 ～ 202）。瓦器椀から13世紀末から14世紀前半と考える。

土坑ＳＫ292（第６図）　調査地南西部、ＳＫ289の南東隣で検出した、楕円形の土坑である。長辺0.75m、短辺0.5m、深さ0.5mを測る。調査中は土坑と判断したが、同規模の柱穴が周辺に存在することから柱穴の可能性もある。遺物実測図は柱穴群出土とした。瓦器椀（18）が出土した。

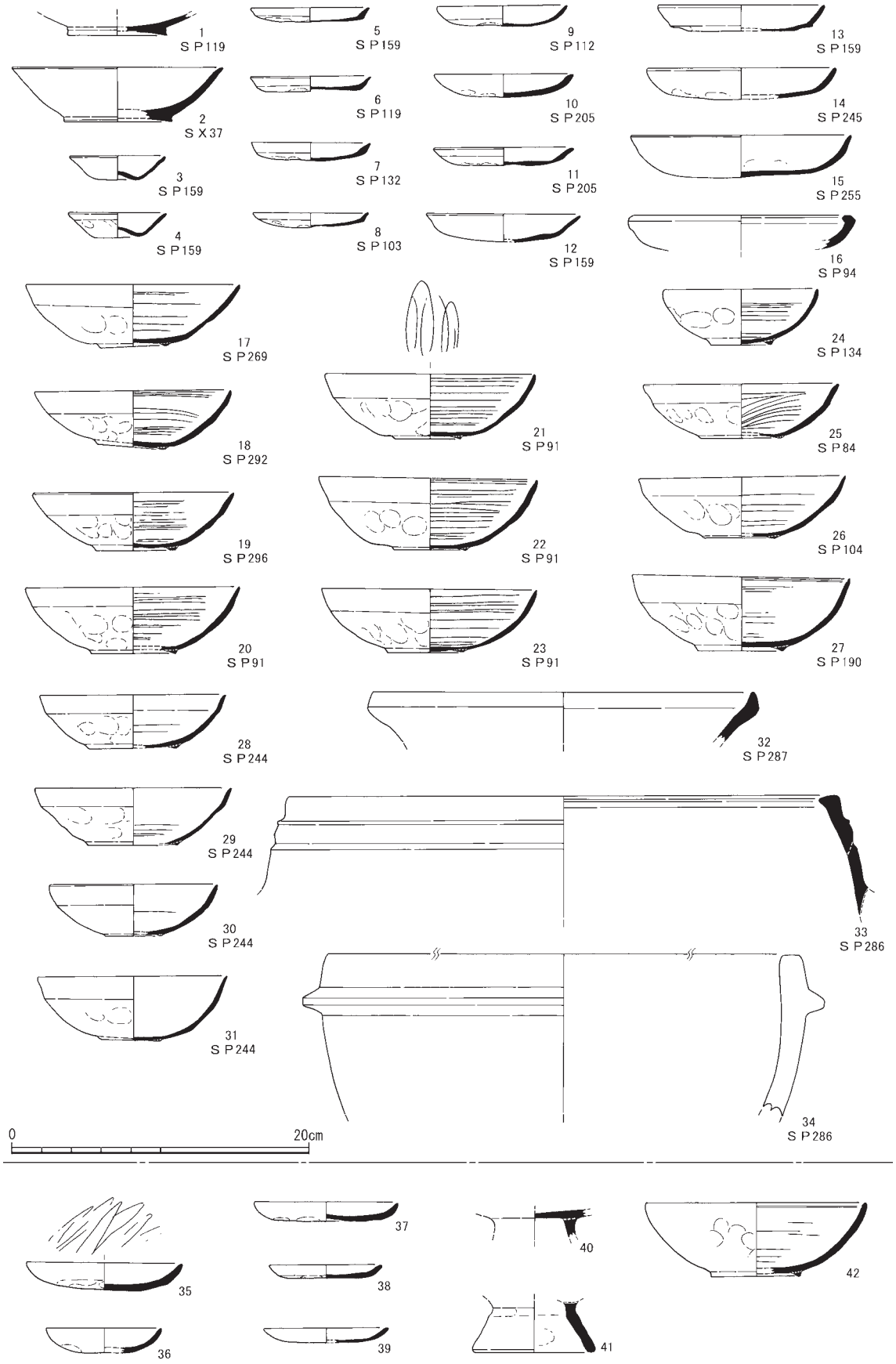
不明遺構ＳＸ268（第６図）　調査地西辺中央部で検出した。小泉川に向けて落ち込む形で検出したため、旧小泉川の河川肩部になる可能性がある。埋土中から、土師器皿や瓦器椀が出土した（203 ～ 207）。

溝ＳＤ70（第17図）　調査地北側、掘立柱建物跡ＳＢ03・04の西側で検出した南北方向の溝である。わずかに蛇行するが、両掘立柱建物跡に重なることなく、むしろ建物の西辺に平行するように検出した。検出長26.0m、幅1.8 ～ 2.3m、深さ0.1 ～ 0.15mを測る。３区画に分けて遺物を取り上げた。区画境でＢ－Ｂ‘、Ｃ－Ｃ’の断面図を作成した。１・２区からは少量の遺物が破片の状態で出土した。それに対し３区からは多量の遺物が出土した。遺物は、土師器皿や瓦器椀をはじめ白磁や石鍋のほか、白磁の合子蓋がある（208 ～ 252）。特に西方に溝が分岐する付近に遺物が集中した。西方に分岐する溝の南肩部付近から出土した遺物は、正位置あるいは裏向けに重なって出土した。この遺物群については、当初溝の埋土中から出土したと考えたが、溝完掘後に溝の底面で柱穴を検出したことから、この遺物群は柱穴に伴ったものである可能性もある。瓦器椀は、13世紀前半と14世紀前半のものが出土することから、掘立柱建物跡群が存在した期間、この溝は機能していたと思われる。

６．出土遺物（第18～24図）

出土遺物には土師器や瓦器が多く、土器・金属器（貨幣）などがコンテナバッドにして18箱出土した。以下、出土遺構ごとに記述する。

柱穴群（第18図１～ 34）　柱穴から出土した遺物は第18図に図示し、図番の下に出土した遺構



第18図　出土遺物実測図（１）

番号を併記した。今回検出した掘立柱建物跡に伴う遺物としては、ＳＢ01に伴うものが32～34で、ＳＢ03に伴うものが９で、ＳＢ04に伴うものが28～30である。20～23はＳＰ91から出土したもので、柱抜き取り後に意図的に埋納されたと判断される遺物である。

１・２は、須恵器椀である。蛇の目高台である。この時期の遺物の出土は極めて少ないことから、混入したと思われる。３・４は、土師器皿である。底部中央が上方に盛り上がる、いわゆるへそ皿である。白色系の土師器皿である。14世紀前半である。５～８は、平坦な底部と短く外反する口縁部からなる。内外面にユビオサエの痕跡がわずかに残る。９～13は、丸みを帯びた底部と外上方に短く立ち上がる口縁部からなる。底部に指押さえ痕跡が残るものもある。14･15は、平坦な底部から上方に立ち上がる皿である。口径8.0～11.0cmの５～13と比べて、14・15は12.5～14.5cmとひとまわり大きい。部分的に指押さえ痕跡が残る。いずれもＤタイプの土師器皿である。(注8) 16は、口縁端部が内上方に尖る。器壁の厚い皿である。17～27は、楠葉型の瓦器椀である。平坦な底部から内湾しながら立ち上がり、口縁部は上方に立ち上がる。体部から口縁部内面には、ヘラミガキを施す。外面下半には指押さえ痕跡が残る。低い高台を貼り付ける。17～21、23～26は、口縁端部を尖り気味に丸くおさめる。体部半ば上位で、器壁を厚くして、わずかに屈曲する。22・27は口縁部内面、端部付近にヘラ状工具による沈線が巡る。28～31は、口径11.5～13.5cmとやや口径の小さなもので、底部から体部にかけて丸みをもつ。底部内面下半に粗いヘラミガキを施す。外面に指押さえ痕跡が部分的にみられる。簡略された高台が付く。32は、東播系の須恵器鉢である。口縁端部を上方に尖らせる。33は、瓦質土器の羽釜である。34は、石鍋である。

配石遺構ＳＫ45（第18図35～42）　配石遺構ＳＫ45は、掘立柱建物跡ＳＢ03の付属施設と考えられたことから、これらの遺物はＳＢ03の構築時期を示すものである。

35は、瓦器皿である。見込みにジグザグ状のヘラミガキを施す。36～39は、口径8.0～10.0cmのＤタイプの皿である。底部外面に指押さえ痕跡が残る。40・41は、高台付皿である。高台は外下方を向き、丸くおさめる。42は、楠葉型の瓦器椀である。内外面は摩滅が著しいが、口縁部内面端部付近に１条の沈潜が巡り、体部内面にはヘラミガキが認められた。外面には指押さえ痕跡が部分的に残る。断面逆三角形の高台が付く。13世紀前半と思われる。

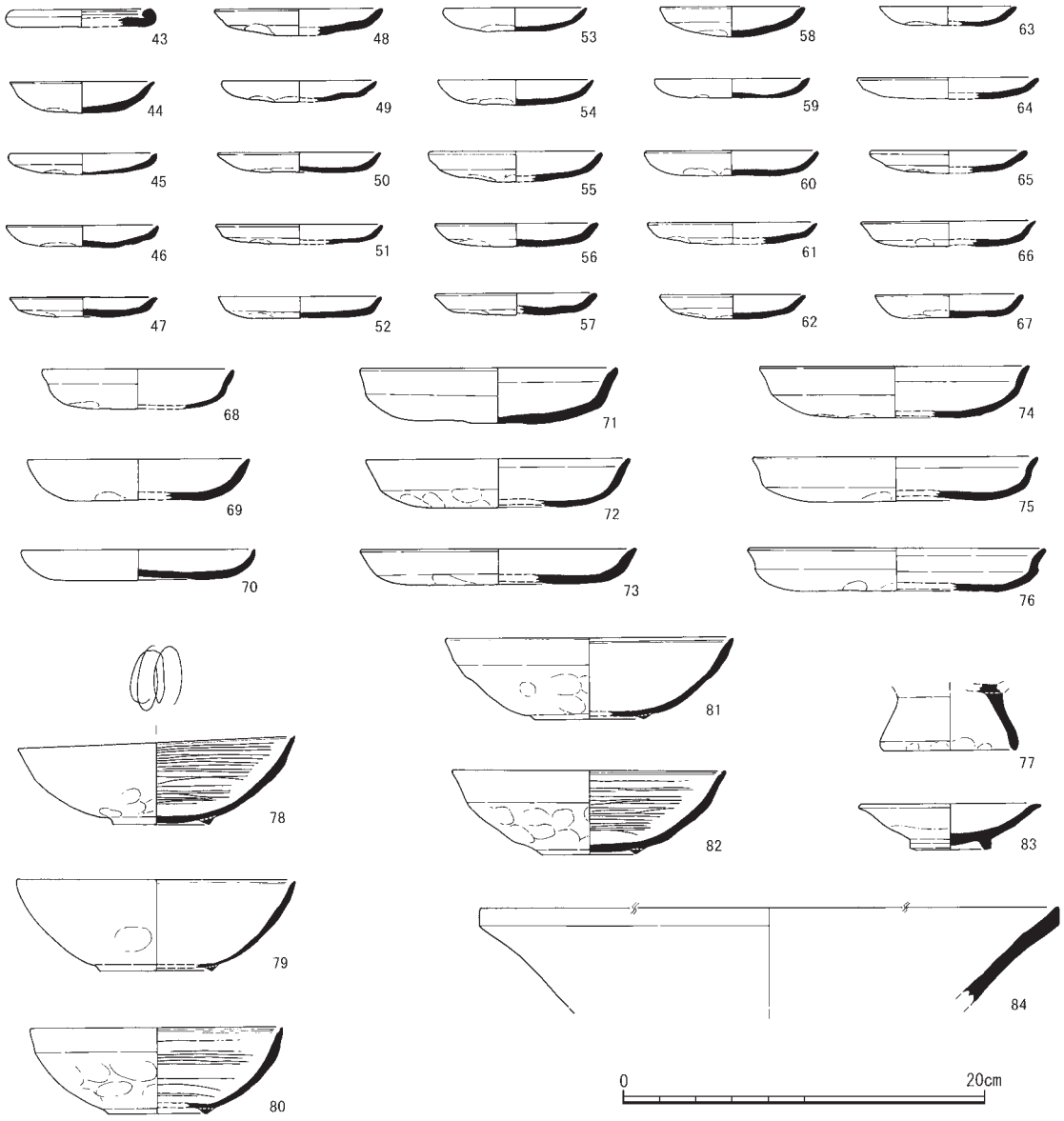
溝ＳＤ86及び周辺部（第19図43～84）　掘立柱建物跡ＳＢ01周辺部、溝ＳＤ86内、肩部付近から出土した遺物群である。ＳＢ01に伴う施設、あるいはそこで行われた祭祀もしくは儀式に係わる遺物と考えられることから、ＳＢ01の時期を示す遺物群と考える。出土地点の明確なものは第８図に示した。その他は溝ＳＤ86内出土である。

43は、口縁端部が玉縁状のＣタイプの皿である。いわゆるコースター型の皿である。44～76は、土師器皿である。44は、体部から口縁部にかけて丸みを帯びて立ち上がる。45～67は、平坦な底部と短く外上方に立ち上がる口縁部からなる。口径9.0cm前後のＤタイプの皿である。体部外面に指押さえ痕跡が認められた。68～76は、口径11.0～16.0cmの大型の皿である。口縁部を強く一段ナデを施し、端部は外反する。底部外面に指押さえ痕跡が残る。Ｄタイプの皿である。77

は、高台付皿である。端部は、下方に尖る。端部内外面に、指押さえ痕跡が認められた。78～82は、楠葉型の瓦器椀である。平坦な底部から体部は丸みを帯びて立ち上がる。口縁部内面端部付近に沈線が巡る。体部内面にヘラミガキを施し、外面下半に指押さえ痕が認められる。高さの低い、逆三角形の高台を貼り付ける。78の見込みには、ヘラミガキを施す。83は、白磁皿である。84は、須恵器鉢である。

井戸ＳＥ10・38（第20図85～96）　井戸ＳＥ10出土のものは、85・89・92・93・96で、井戸ＳＥ38出土は、86～88・90・91・94・95である。

85は、須恵器杯底部である。底部縁部に輪状高台を貼り付ける。９世紀前半のもので、瓦器椀とともに出土したことから、混入遺物である。86は、緑釉陶器椀の底部である。削り出し高台である。内外面に緑釉を施す。10世紀代のもので、混入遺物である。87・88・90・91は、楠葉型の



第19図　出土遺物実測図（２）

瓦器椀である。87は、口縁部内面端部付近に沈線が巡る。88・90・91は、口縁端部を上方に尖らせる。逆三角形の高台を貼り付ける。体部内面には、ヘラミガキが施される。外面下半には指押さえ痕跡が残る。ＳＥ38の時期を決めるもので、13世紀前半と思われる。89は、外上方に立ち上がる瓦器椀で、口径10.5cmと小型である。内面に粗くヘラミガキを施す。13世紀末から14世紀初頭と考える。ＳＥ10の時期を決めるものである。92は、瓦質の壺である。93は、青磁椀の底部である。94・95は、土師器皿である。口縁部を強く一段ナデする。Ｄタイプの皿である。96は、東播系の須恵器鉢である。

土坑ＳＫ04（第20図97～138）　土坑ＳＫ04-Ｅ出土のものは、97・99・100・103～115・117～120・122～124・126・130～133・135～137である。土坑ＳＫ04-Ｗ出土のものは、98・101・102・116・121・125・127～129・134・138である。97～126は、口径8.0cm前後の小型の皿である。平坦な底部と外上方に立ち上がる口縁部からなる。底部外面に指押さえ痕を残す。Ｄタイプの皿である。127～132は、口径12.0cm前後の皿である。平坦な底部と外反する口縁部からなる。底部外面に指押さえを施す。129・131・132は、口縁部を一段ナデする。底部外面を指押さえする。133～136は、体部が外上方に立ち上がり、口縁部付近で緩やかに屈曲し、端部は上に尖る。外面に指押さえ痕跡が残る。内面にはヘラミガキは認められない。14世紀前半と考える。137は、瓦器鍋である。口縁部はＳ字状に屈曲する。口縁部外面に指押さえ痕を認める。138は、東播系の須恵器鉢である。

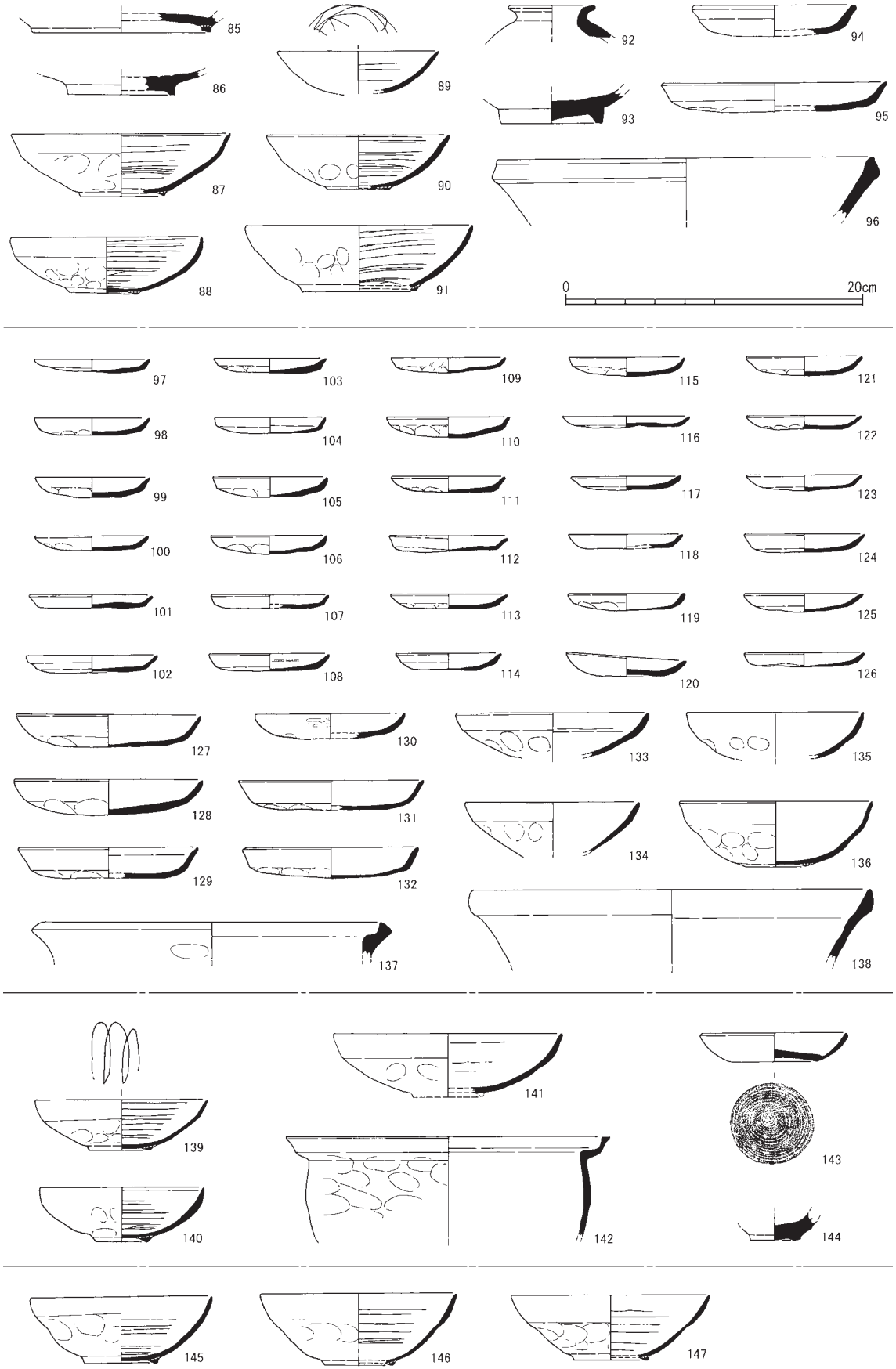
土坑ＳＫ138（第20図139～144）　139～141は、体部は上方に立ち上がり、口縁部付近でわずかに屈曲し、端部は上方を向く。体部内面をヘラミガキし、体部外面下半に指押さえを施す。逆三角形の高台を貼り付ける。13世紀後半である。142は、瓦質の鍋である。体部外面に指押さえ痕が多くみられる。143は、白磁皿である。底部外面に糸切り痕が残る。144は、天目茶碗の底部である。

土坑ＳＫ128（第20図145～147）　145～147は、口径13.0cm前後の楠葉型瓦器椀である。内面にはヘラミガキ、外面下半に指押さえ痕が残る。13世紀後半である。

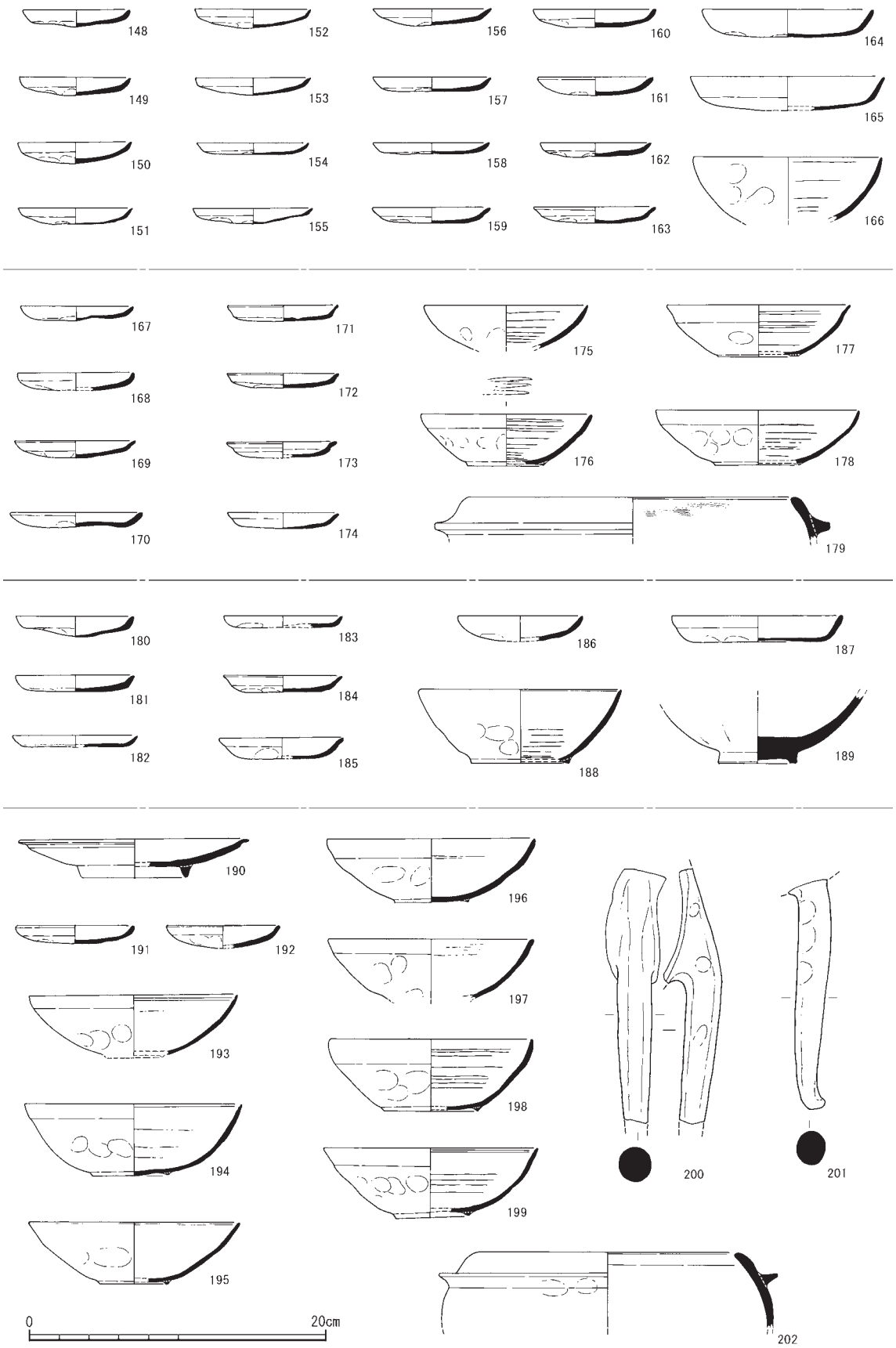
土坑ＳＫ63（第21図148～166）　148～163は、口径8.0cm前後の土師器皿である。平坦な底部と短く立ち上がる口縁部からなる。外面底部に指押さえを施す。Ｄタイプの皿である。164・165は、口径12.0cm前後の皿である。口縁部を一段ナデする。外面底部に指押さえを施す。166は、体部は丸みを帯びながら立ち上がり、口縁部は上方に尖る。内面にはヘラミガキを、外面には指押さえを施す。13世紀後半と考える。

土坑ＳＫ64（第21図167～179）　167～174は、口径8.0cm前後の土師器皿である。167～172・174は、平坦な底部と外上方に短く立ち上がる口縁部からなる。外面底部に指押さえ痕跡が残る。Ｄタイプの皿である。173は、口縁部がＳ字状に大きく外反する、ての字口縁の皿である。175～178は、楠葉型の瓦器椀である。口縁部付近で緩やかに屈曲し、端部は上方に尖る。内面はヘラミガキを、外面には指押さえを施す。かなり低い高台を貼り付ける。179は、瓦質の羽釜である。

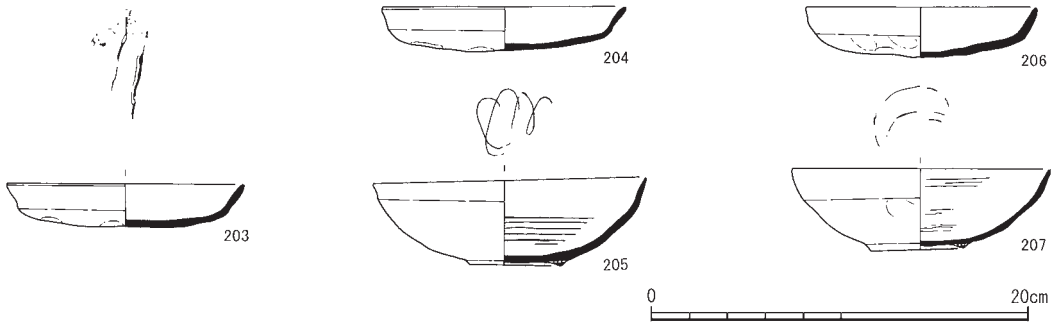
土坑ＳＫ65（第21図180～189）　180～186は、口径8.0cm前後の土師器皿である。Ｄタイプの



第20図　出土遺物実測図（３）



第21図　出土遺物実測図（４）



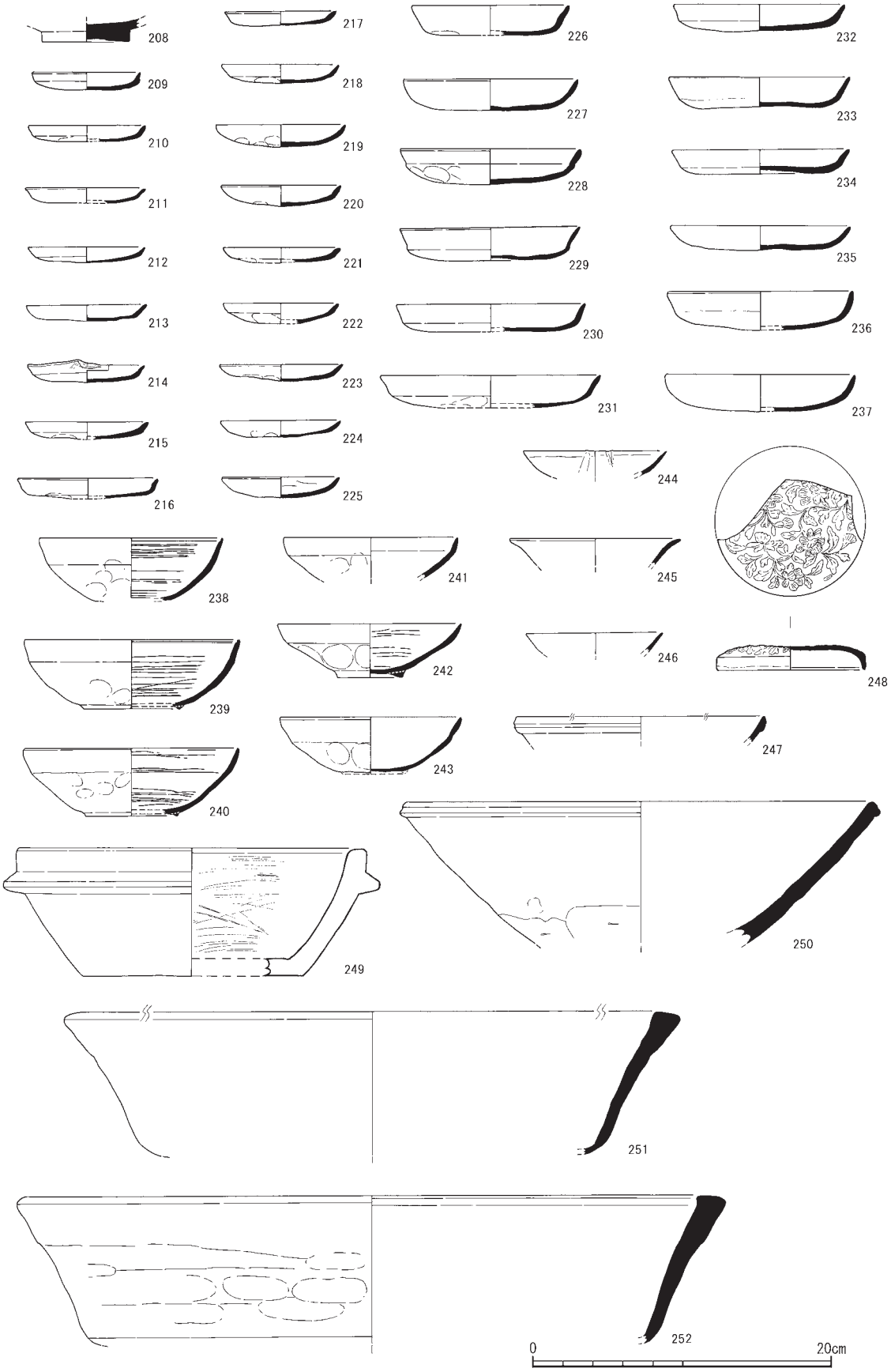
第22図　出土遺物実測図（５）

皿である。外面底部に指押さえを施す。187は、口径11.5cmの土師器皿である。188は、口縁部内面に沈線を施す、楠葉型の瓦器椀である。かなり摩滅していたが、内面はヘラミガキを、外面は指押さえを施す。逆三角形の高台を貼り付ける。13世紀後半と思われる。189は、青磁椀の底部である。外面に連弁文を認める。

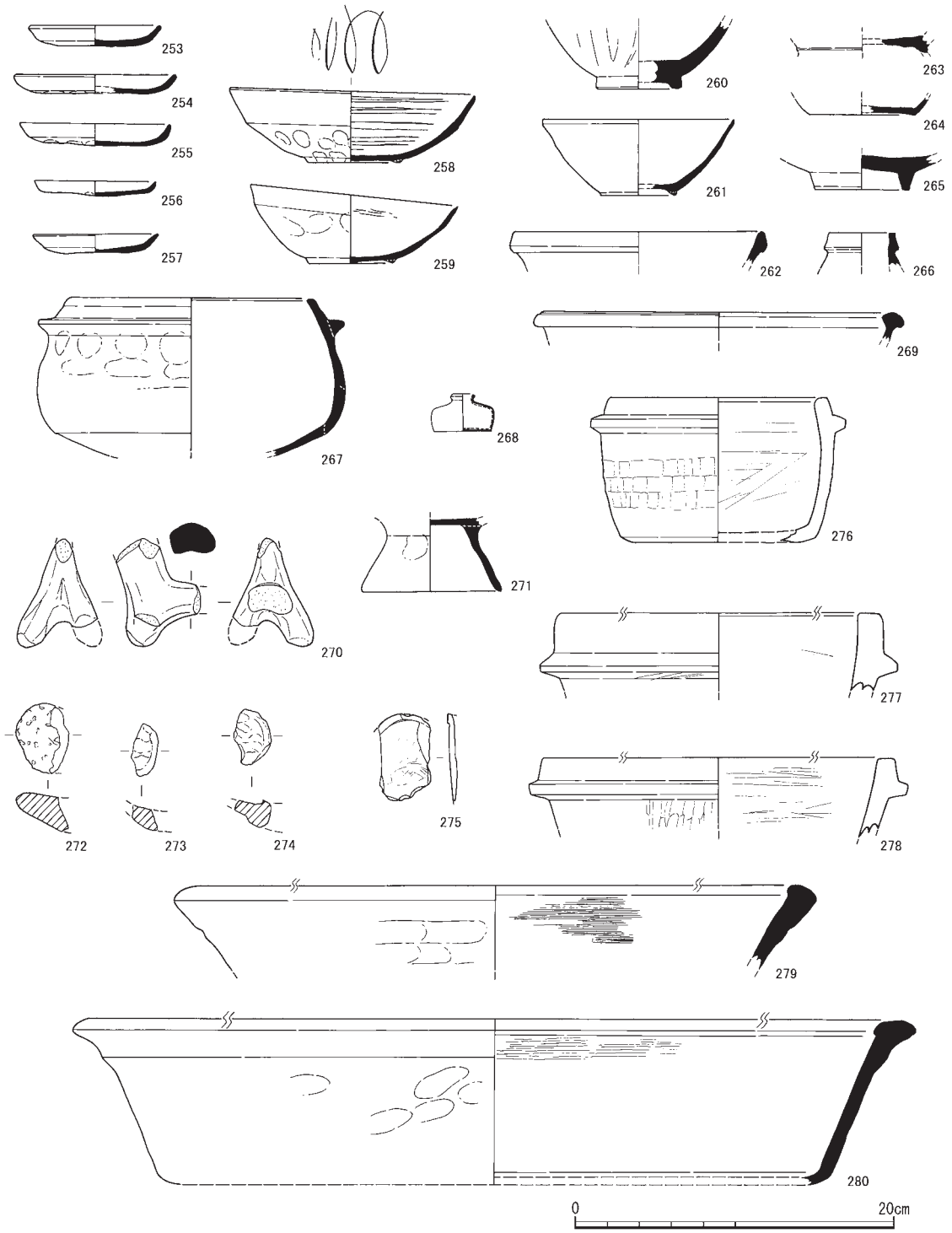
土坑ＳＫ289（第21図190 ～ 202）　190は、須恵器皿である。削りだし高台が付く。平坦な底部から緩やかに立ち上がり、口縁端部をＳ字状に屈曲させる。10世紀代の皿と思われる。191・192は、口径8.0cm前後の皿である。外面底部に指押さえ痕跡を認める。193 ～ 199は、楠葉型の瓦器椀である。193 ～ 195・199の口縁部内面には沈線を施す。内面にはヘラミガキを、外面には指押さえを施す。13世紀後半のものと思われる。200 ～ 202は、瓦質の羽釜である。200・201の脚部が３か所に付く。同一個体と思われる。

不明遺構ＳＸ268（第22図203 ～ 207）　旧小泉川に向かっての傾斜地の埋土中から出土したものと思われる。203・204・206は、口径12.0 ～ 13.0cmの土師器皿である。口縁部を強く一段ナデする。底部外面に指押さえを施す。203内面には長さ4.0cmほどの墨痕が２条認められた。205・207は、口縁部付近でわずかに屈曲する、楠葉型の瓦器椀である。内面にはヘラミガキを、外面には指押さえを施す。底部には、逆三角形の高台が付く。13世紀後半と思われる。

溝ＳＤ70（第23図208 ～ 252）　208は、須恵器椀である。高台は削り出し、蛇の目高台にする。209 ～ 225は、口径8.0cm前後の土師器皿である。平坦な底部と短く外上方に立ち上がる口縁部からなる209 ～ 218と、やや丸みを帯びる底部と短く外上方に立ち上がる口縁部からなる219 ～ 225がある。226 ～ 237は、口径12.0cm前後の土師器皿である。口縁部を一段ナデする。いずれも外面底部を指押さえする、Ｄタイプの皿である。238 ～ 240・243は、口縁部付近でわずかに屈曲する楠葉型の瓦器椀である。243は、内面が摩滅しており、調整不明である。238 ～ 240の内面にはヘラミガキ痕跡が、外面には指押さえ痕跡が認められる。238・239口縁部内面には、１条の沈線が巡る。逆三角形の高台が付く。13世紀後半である。241･242は、口縁部付近で大きく屈曲する、楠葉型の瓦器椀である。内面を粗くヘラミガキし､外面は指押さえする。13世紀末頃と思われる。244は、青磁椀である。245・246は、白磁椀である。247は、白磁の鉢である。248は、白磁の合子蓋である。平坦な天井部と下方に尖る口縁部からなる。天井部外面には、牡丹文を施す。杯部は出土しなかった。これと同様のものが、完形品で宇治市の白川金色院跡の経塚から出土してい



第23図　出土遺物実測図（６）



第24図　出土遺物実測図（７）

る。[注9]249は、石鍋である。250は、須恵器鉢である。251・252は、土師器盤である。251は、破片のため口径は不明である。252は、口径47.0cmを測る。

包含層（第24図253～280）　253～257は、土師器皿である。258･259は、瓦器椀である。260は、青磁椀である。261は、灰釉陶器の椀である。262は、白磁の鉢である。263は、緑釉陶器の椀である。内面と高台外面に施釉する。264は、平底の白磁皿である。265は、白磁椀である。266は、

梅壺の口縁部である。267は、瓦質の羽釜である。外面には指押さえを施す。268は、青銅製の水滴である。口径1.2cm、体部径3.9cm、底部径3.6cm、高さ2.3cmを測る。269は、須恵器鉢である。玉縁状の口縁である。270は、土馬である。271は、高台付皿である。272 ～ 274は、鍛冶滓である。関連する遺構は検出していない。275は、石製の硯である。276 ～ 278は、石鍋である。276は、唯一底部から口縁部まで残る。口径13.6cm、高さ8.8cmを測る。279・280は、土師器盤である。その他、銅銭『開元通寶』が１点と、判読できないもの１点が出土している。

７．まとめ

今回検出した掘立柱建物跡群をはじめ柵列・溝跡・井戸跡などの遺構群は、出土遺物から13世紀から14世紀前半にかけてのものであることが判明した。これらの遺構群は、南北14m、東西15mの約210㎡の空閑地を囲むように配置され、建て替えもこの空閑地を確保するように行われている。

また出土遺物には、白磁の合子蓋をはじめとして、中国製の青磁や白磁、石製の硯や青銅製の水滴などがあり、こういった遺物の出土から、この付近での有力者の屋敷地であった可能性が高いと考えられる。また、出土品の中に甕などの貯蔵容器が出土しなかった点は、今回の出土遺物の特徴の一つと言える。

大山崎中学校新校舎建設に伴う調査（長岡京跡右京第933次調査）では、12世紀代の掘立柱建物跡群や柵列、溝跡などが見つかっており、時代とともに集落域が西方に移っていったものと考えられる。今後周辺地域での発掘調査に期待される。

注１　中川和哉ほか「下植野南遺跡」（『京都府遺跡調査報告書』第25冊　（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）1999

注２　野々口陽子「長岡京跡右京第541次・脇山遺跡発掘調査概要」（『京都府遺跡調査概報』第77冊　（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）1997

注３　岩崎　誠「右京第473次（7ANQKS-2地区）調査概報」（『長岡京市埋蔵文化財センター年報』平成６年度　（財）長岡京市埋蔵文化財センター）1996

注４　白川成明他「長岡京跡右京第39次（7ANQMK地区）調査略報」（『長岡京文化財調査報告』第11冊　長岡京市教育委員会）1983

注５　注２と同じ

注６　古閑正浩ほか「境野１号墳」（『大山崎町埋蔵文化財調査報告書』第34集　大山崎町教育委員会）2007

注７　岩松　保「百々遺跡」（『京都府遺跡調査報告書』第24冊　（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）1998

注８　ここで記したタイプは、伊野近富「１．土師器皿」（『概説　中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編　真陽社）1995に準じた。

注９　荒川　史「白川金色院跡発掘調査報告書」（『宇治市文化財調査報告』第６冊　宇治市教育委員会）2003

図　　版

(1)松田遺跡調査地全景(西から)

(2)松田遺跡調査地遠景(東から)

(1)松田遺跡調査地全景(上空から、右が北)

(2)掘立柱建物跡ＳＢ２～４全景(上空から、右が北)

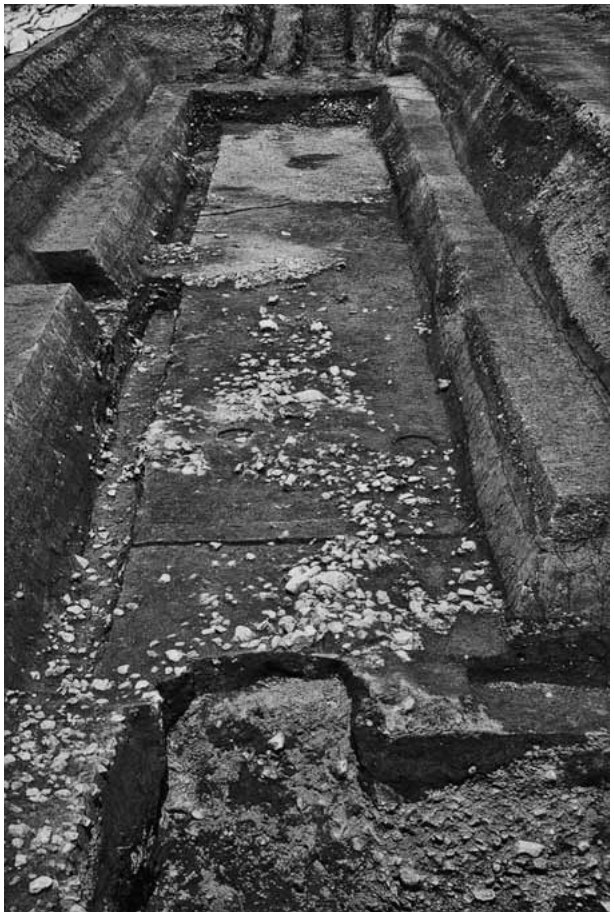
(1) Ａトレンチ（南北）近景
（南東から）

(2) Ａトレンチ（南北）近景
（北東から）

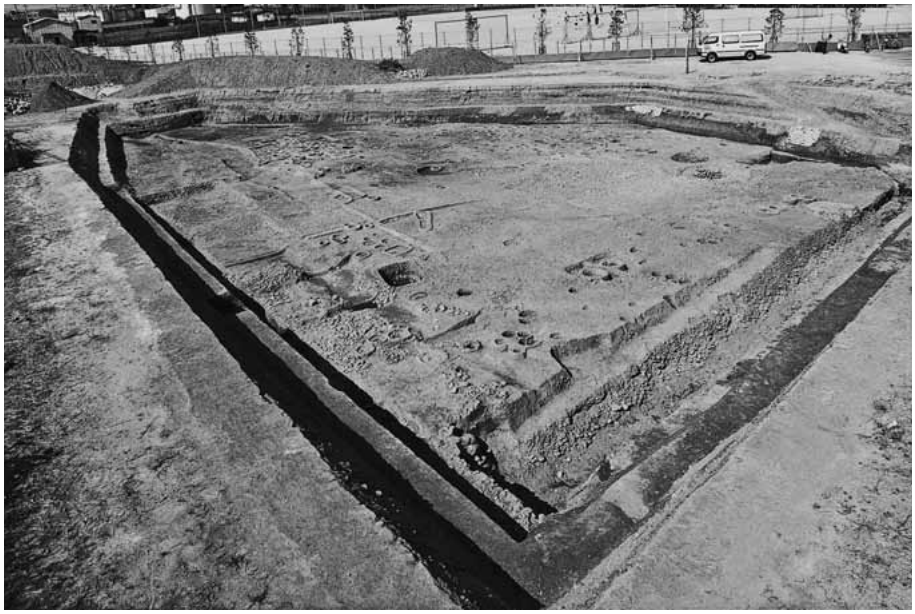
(3) Ａトレンチ（南東隅）近景
（北西から）

(1) Ｂトレンチ（南北）近景
（南西から）

(2) Ｂトレンチ（東西）近景
（南西から）



(3) Ｂトレンチ（南北）近景（南から）



(1)拡張区全景(南西から)

(2)拡張区南壁断面(北西から)

(3)拡張区西壁断面(北東から)

(1)掘立柱建物跡ＳＢ01近景
（南から）

(2)掘立柱建物跡ＳＢ01近景
（南から）

(3)掘立柱建物跡ＳＢ01近景
（北から）

(1)溝ＳＤ86堆積断面(南から)

(2)溝ＳＤ86堆積断面(南から)

(3)溝ＳＤ86堆積断面(南から)

(1)掘立柱建物跡ＳＢ01北側
遺物出土状況(東から)

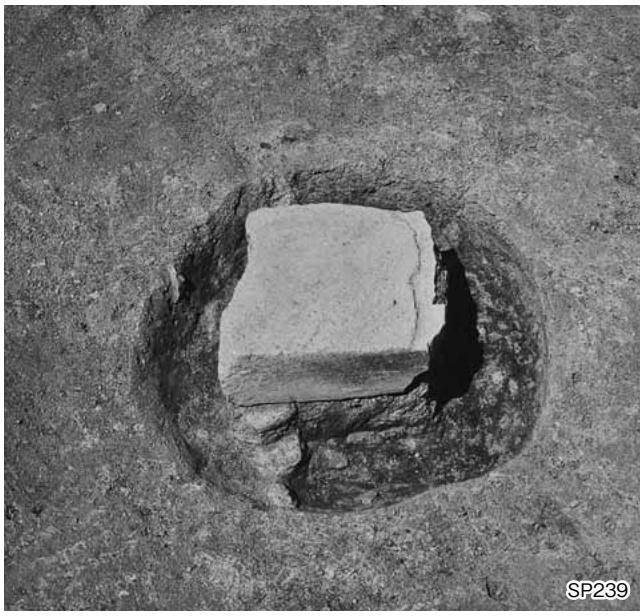
(2)掘立柱建物跡ＳＢ01北西側
遺物出土状況(南から)

(3)掘立柱建物跡ＳＢ01北西側
遺物出土状況(東から)

(1)掘立柱建物跡ＳＢ02 ～ 04、
井戸ＳＥ10・38全景
（上空から、右が北）

(2)掘立柱建物跡ＳＢ02 ～ 04全景
（南から）

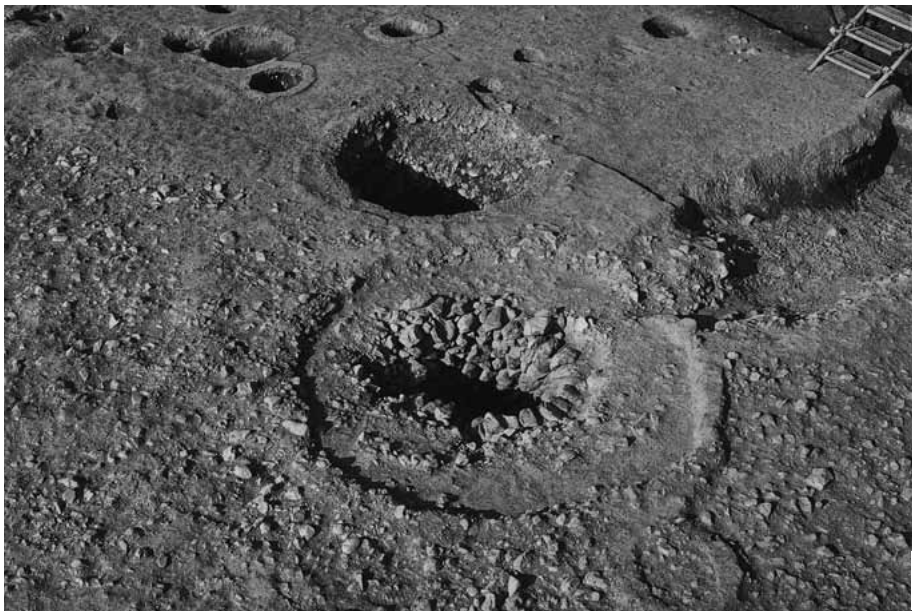
(3)掘立柱建物跡ＳＢ02 ～ 04全景
（北から）



柱穴近景(根石をもつ柱穴)

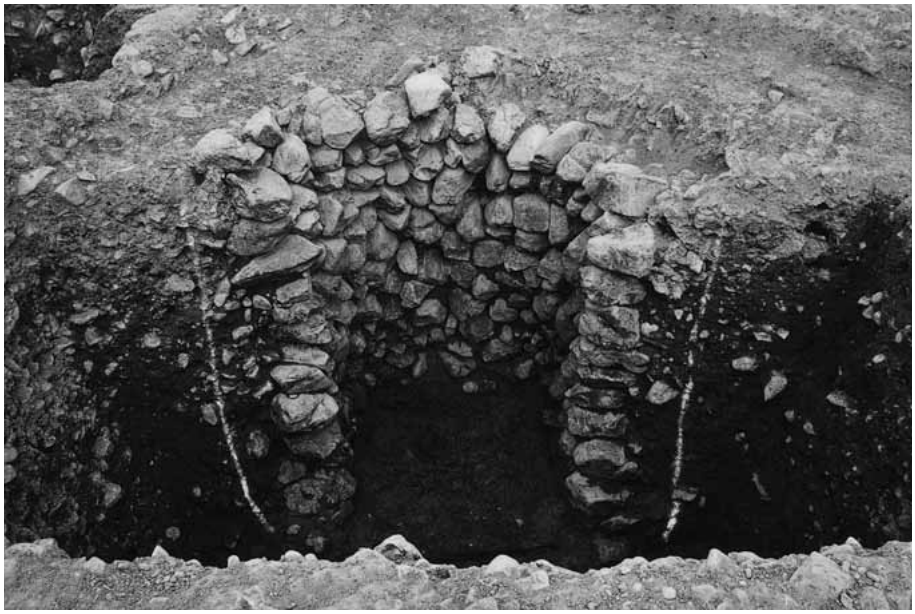
柱穴近景（柱穴内遺物出土状況）

(1)配石遺構ＳＫ45近景(北から)



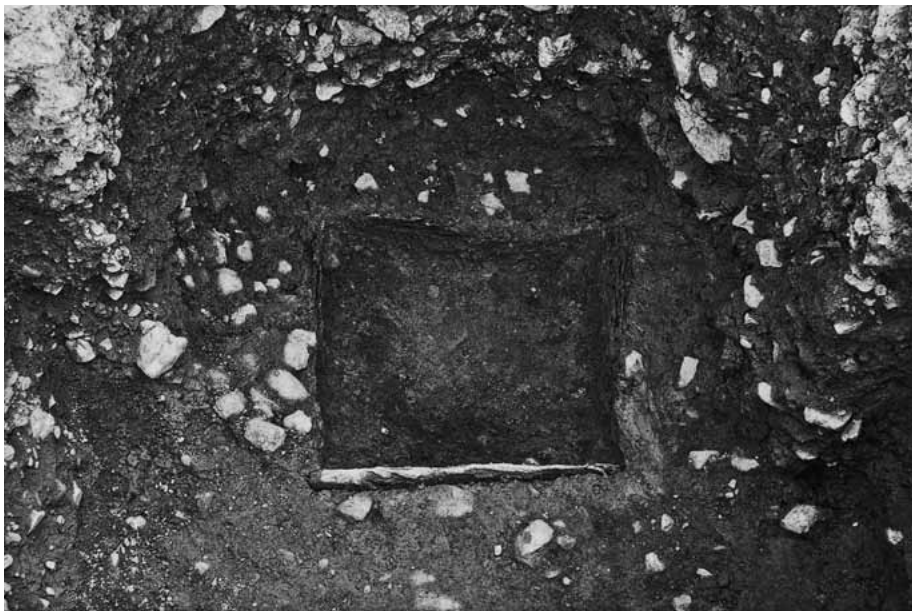
(2)井戸ＳＥ10・38近景
(南から、手前がＳＥ10)

(3)井戸ＳＥ38断ち割り状況
(西から)



(1)井戸ＳＥ10断ち割り状況
（西から）

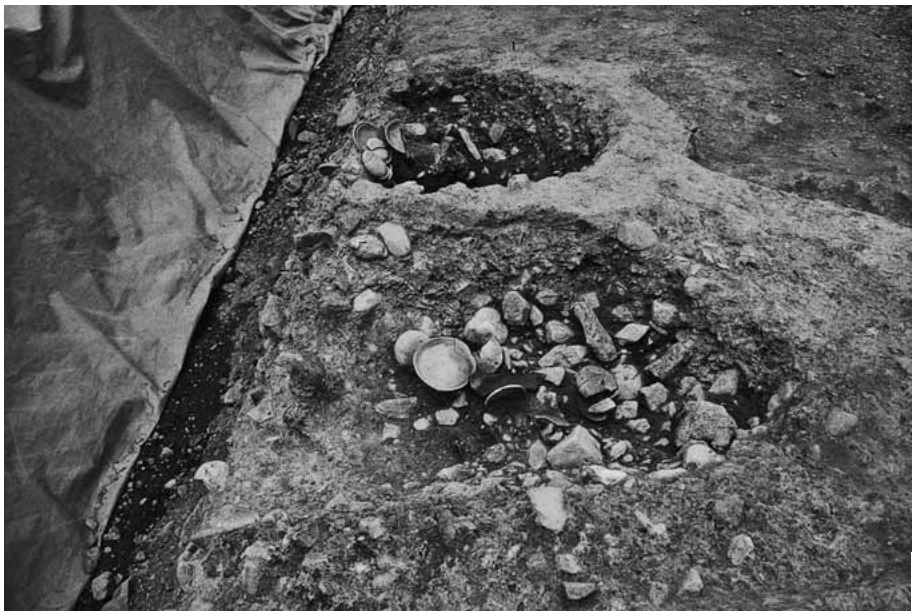
(2)井戸ＳＥ10木枠検出状況
（西から）



(3)井戸ＳＥ10木枠近景（西から）

(1)土坑ＳＫ04近景
（南から、上層遺物）

(2)土坑ＳＫ04近景
（南から、下層遺物）



(3)土坑ＳＫ04近景
（東から、下層遺物）

(1)土坑ＳＫ04遺物出土状況
（東から）

(2)土坑ＳＫ04遺物出土状況
（東から）

(3)土坑ＳＫ63近景（南から）

(1)溝ＳＤ70、３区遺物出土状況（東から）

(2)溝ＳＤ70、３区遺物出土状況（東から）

(3)白磁合子蓋出土状況（北から）

17

28

18

31

20

42

21

78

22

88

27

139

出土遺物 1

145

205

194

207

198

258

199

259

253

255

3

6

7

9

46

52

53

59

97

出土遺物２

98

105

106

111

112

114

115

123

125

126

149

150

151

152

153

154

172

181

256

257

128

204

15

132

206

出土遺物３

203

203

248

248

83

189

包含層

268

275

276

34

SP239

出土遺物 4